

第1章 流域の自然条件

1-1 河川・流域の概要

鈴鹿川^{すずかがわ}は、三重県^{みえけん}の北部に位置し、その源を三重県^{みえけん}亀山市^{かめやまし}と滋賀県^{しがけん}甲賀市^{こうがし}の県境に位置する高畑山^{たかばたやま}（標高 773m）に発し、幾つもの溪流を合わせながら、山間部を東流し、加太川^{かぶとがわ}等の支川を合わせて伊勢平野^{いせへいや}に出て、東北に流下し、安楽川^{あんらくかわ}を合わせ河口より 5km 付近の地点で鈴鹿川派川^{すずかがわはせん}を分派したのち、内部川^{うつべがわ}を合わせ伊勢湾^{いせわん}に注ぐ、幹川流路延長 38km、流域面積 323km²の一級河川である。

その流域は、三重県四日市市^{よっかいちし}、鈴鹿市^{すずかし}、亀山市の3市からなり、流域の土地利用は山地等が約 59%、水田や畑地等の農地が約 31%、宅地等の市街地が約 10%となっている。

流域には、JR関西本線^{かんさいほんせん}、紀勢本線^{きせいほんせん}、近鉄名古屋線^{きんてつなごやせん}及び東名阪自動車道^{ひがしめいほん}、国道1号、国道23号、国道25号等があり、この地方の交通の要衝となっている。このように発達した交通網を背景に、四日市市の臨海部には石油コンビナート群をはじめとした産業が発達し、鈴鹿市、亀山市では自動車産業や電子部品等を中心とした工業が発達している。また、中流域の扇状の台地では緩やかな地形を利用したお茶の栽培が盛んで県内有数の産地となっている。

古来より鈴鹿川沿いは近江・大和方面^{おうみ やまと}への重要な交通路として利用されており、古代の三関のひとつである「鈴鹿の関」が置かれていた。また、鈴鹿川沿川には旧東海道が通り、宿場町が開け、今も関宿^{せきじゆく}の街並みなどが当時の面影を残している。

このようなことから、鈴鹿川流域はこの地域における社会・経済・文化の基盤を成している。

さらに、源流部は鈴鹿国定公園に指定され、石水溪^{せきすいけい}や小岐須溪谷^{おぎす}等の自然豊かな景勝地が点在するなど、豊かな自然環境・河川景観にも恵まれていることから、本水系の治水・利水・環境についての意義は極めて大きい。



図 1－1 鈴鹿川流域図

表 1－1 鈴鹿川流域の各種緒元表

項 目	緒 元	備 考
幹川流路延長	38km	全国 101 位／109 水系
流域面積	323km ²	全国 102 位／109 水系
流域内市町村	3 市	四日市市、鈴鹿市、亀山市
流域内人口	約 11 万人	
支川数	45 支川	

1-2 地形

流域の地形は、上流部は北西境界線を尾根とする 800～1,000m 程度の^{かまがたけ}鎌ヶ岳、^{せんがたけ}仙ヶ岳、高畑山などからなる鈴鹿山脈によって概ね占められており、山脈裾部の丘陵地では急峻な地形を有し、山間をぬって溪谷が形成されている。中流部は、急傾斜河川よりもたらされた扇状の台地、流域東部の沖積低地からなり、亀山市街地周辺からは、段丘上に平地が広がっている。中流部から下流部にかけては、北側は鈴鹿山麓から発する支川^{おんべ}御幣川、内部川にはさまれた標高 60～180m の広い扇状の台地が波状に重なり、南側は河口まで沖積平野が形成され肥沃な耕地となって、伊勢湾に連なっている。

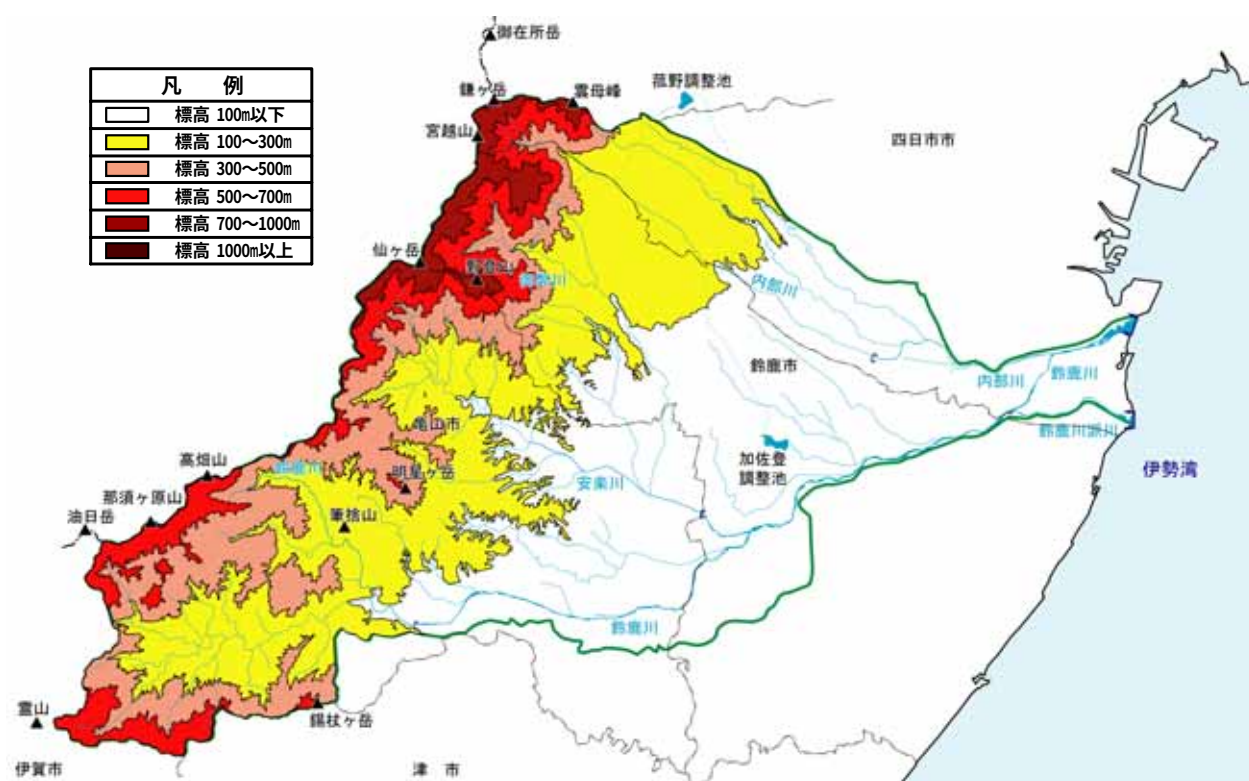


図1-2 鈴鹿川流域地形図

【出典：「1/50,000 地形図（国土地理院）」より作成】

1-3 地質

流域の地質は、山岳部は主に花崗岩類(黒雲母又は両雲母花崗岩)・花崗閃緑岩(黒雲母角閃石花崗閃緑岩)よりなり、一部、加太川上流に中新世鈴鹿層群加太累層(礫岩、砂岩、シルト岩及び凝灰岩)、御幣川上流に古生代秩父層群(砂岩、頁岩、輝緑岩および輝緑凝灰岩)、三波川変成岩類(石灰岩)がある。

本川中流部および安楽川、御幣川にはさまれた地帯は、鮮新世奄芸層群(砂岩、泥岩、礫岩、凝灰岩、亜炭)、御幣川、内部川にはさまれた地帯は沖積層(砂礫および粘土)で形成されている。

水源地一帯の砂岩、花崗岩類は風化が著しく、山崩れの素因を持っており、古くは江戸時代より砂防工事が実施されている。

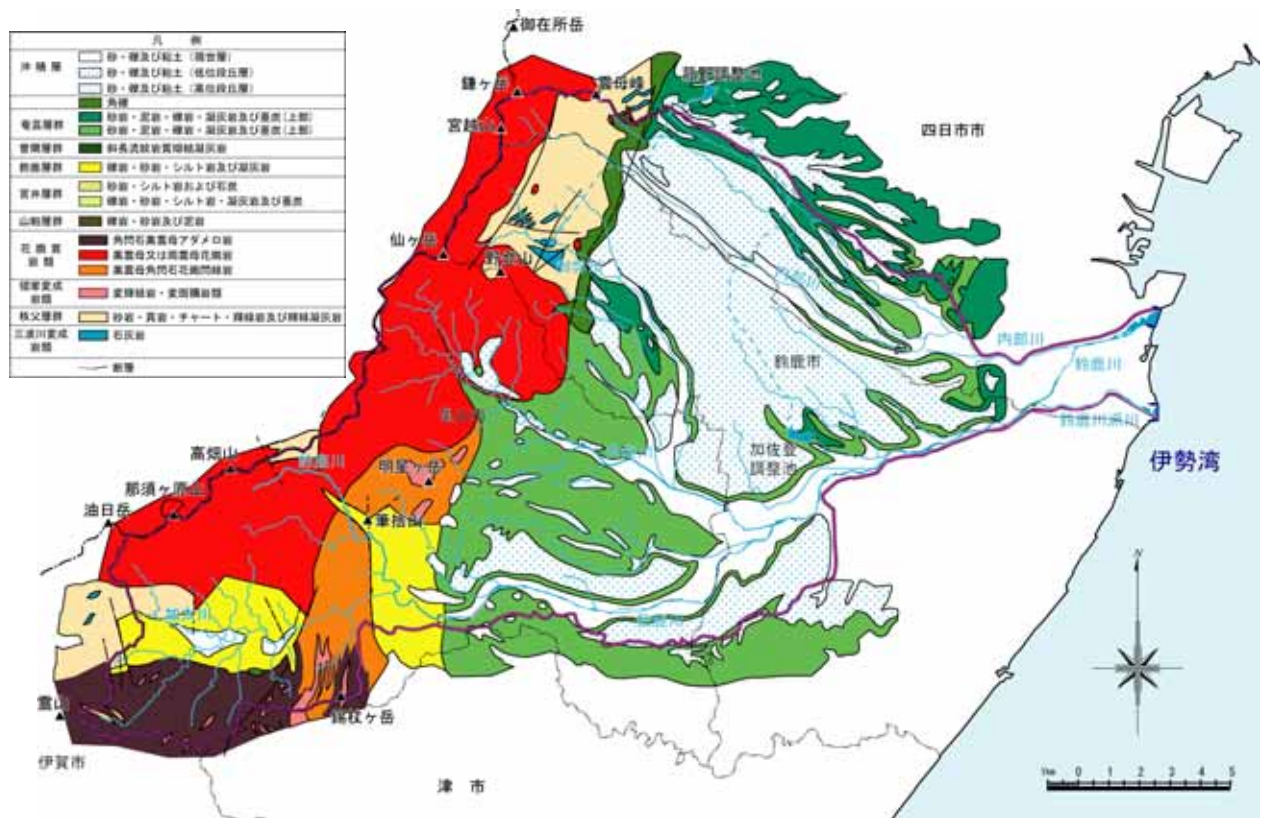


図1-3 鈴鹿川流域地質図

【出典：「三重県地質図(三重県鉱業会;昭和55年)」より作成】

1-4 気候・気象

流域の気候は、年平均気温は 15℃程度で、全体的に温暖な気候を示している。流域内の平均年間降水量（昭和 61 年～平成 17 年）は、山間部で 2,200mm を超え、平野部で約 1,800～2,000mm である。

また、鈴鹿山脈が西側に位置していることから、“鈴鹿おろし”と呼ばれる冬の季節風が強いことが知られている。



図 1-4 年平均降水分布図（昭和 61 年～平成 17 年平均）

【出典：「雨量年表（国土交通省）」、気象庁データ】

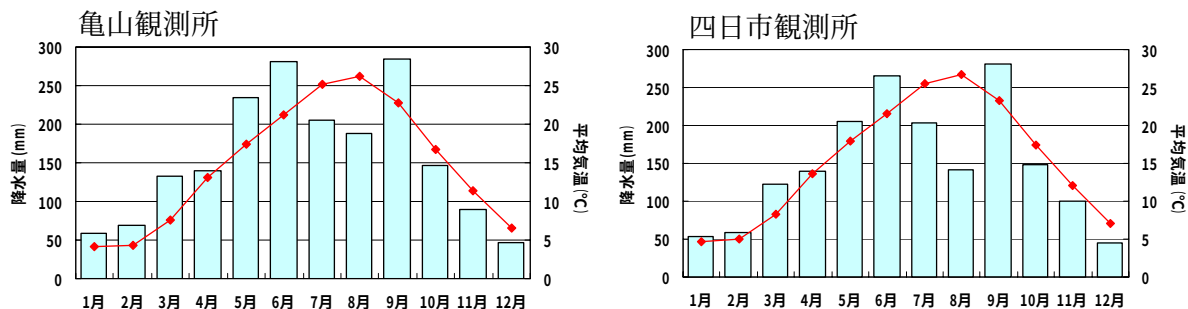


図 1-5 月別平均気温・降水量変化図（昭和 61 年～平成 17 年平均）

【出典：気象庁データ】

第2章 流域及び河川の自然状況

2-1 流域の自然環境

1) 自然環境の概要

鈴鹿川流域は地勢が急峻で、上流域は山間をぬって溪谷を刻み、亀山市の市街地あたりから段丘状の平地が開ける。中流域から下流域を北側・南側に分けてみると、北側は鈴鹿山麓から発する扇状の台地が波状に重なっている。これに対し南側は海岸に至るまで沖積平野が開け、そのほとんどが水田に利用されている。

流域の植生帯は暖帯林から温帯林に属すが、その大半を人工林が占め、自然植生が見られるのは標高の高い地域や神社林等に限られている。

土地利用は、上流域の山地は森林が大半を占め、中流域の扇状の台地には茶畑を中心とした耕作地が広がり、下流域の平野部は水田や市街地として利用されている。また四日市市の臨海部をはじめ、鈴鹿市・亀山市の内陸部でも多くの工場が立地している。

このような、流域の地形や地質、植生、土地利用等の特徴を踏まえると、鈴鹿川流域は、急峻な地形で豊かな溪谷美を見せる上流域、扇状の台地が開け、茶畑としての利用が盛んな中流域、平野が広がり、水田や市街地が広がる下流域に大きく区分される。

〔上流域：源流部～加太川合流点付近〕

標高 300m 以上の山地部で、急峻な鈴鹿山脈に溪谷を刻みながら流下し、支川の上流域に見られる石水溪、小岐須溪谷、宮妻峡といった豊かな溪谷美や、鈴鹿山の鏡岩、筆捨山といった山岳景観に代表される特徴的な景観を形成している。植生はスギ・ヒノキの人工林が大半を占めているが、標高の高い山岳部の一部にはブナ^{のぼり}の自然林が広がり、野登山のブナ林は三重県の天然記念物にも指定されている。

〔中流域：加太川合流点～井尻頭首工^{いじりとうしゅこう}付近〕

標高 100～300m の扇状の台地や平野を主とする。傾斜の緩い扇状の台地には茶畑が、平野部には水田が広がり、ところどころアカマツの植林も見られる。また、鈴鹿市や亀山市の市街地も広がっている。

〔下流域：井尻頭首工付近～河口〕

標高 100m 以下の沖積平野となっており、水田や市街地が広がっている。

河口部にはシギ・チドリ類の休息地となり、環境省の「日本の重要湿地 100」にも選定されている干潟が存在する。



図 2－1 流域区分図

2)流域の自然環境

(1)上流域の自然環境

鈴鹿川の上流域は、三重県と滋賀県の県境をなす鈴鹿山脈が連なり、その大半が鈴鹿国定公園に指定され、石水溪、小岐須溪谷、宮妻峡といった豊かな溪谷美や、鈴鹿山の鏡岩、筆捨山といった山岳景観に代表される特徴的な景観を形成している。

植生はスギ・ヒノキの人工林が大半を占めているが、標高 800m を越える御在所岳から仙ヶ岳、野登山付近はブナの自然林が広がり、野登山のブナ林は三重県の天然記念物にも指定されている。

また、このような山岳地帯には、国指定の天然記念物であるニホンカモシカが生息しているほか、三重県指定の天然記念物であるキリシマミドリシジミや、ムカシトンボ、ムカシヤンマ等の貴重な昆虫類が生息している。



筆捨山（亀山市）

奇岩怪石の多い山で、松、楓、つつじが繁茂している。昔、狩野法眼元信という画家がこの山を描こうとしたが、山の姿の変化が激しくて描けず筆を捨てたのでこの名がついたといわれている。



野登山のブナ林（亀山市）

【出典：石水溪パンフレット（亀山市）】

山頂付近にブナの原生林や樹齢数百年の大杉が林立し、深山の自然の魅力を肌で感じられ、市民をはじめたくさんの人々に親しまれている。標高 852m の野登山山頂付近には、ブナを中心とした落葉広葉樹の原生林が約 4 ha にわたって広がり、西日本の植生を伝える貴重な資料として三重県天然記念物に指定されている。（昭和 31 年 5 月 2 日）

(2)中流域の自然環境

鈴鹿川の中流域は、鈴鹿山麓から発する扇状の台地や沖積平野が広がり、茶畑を中心とした畑地や水田として利用されるほか、アカマツの植林が分布している。

野登山南麓の斜面には坂本の棚田が広がり、平成 11 年に「日本の棚田百選」に選定されており、景勝地となっている。



中流域の茶畑（亀山）

古文書によると、伊勢茶の起源は飯盛山浄林寺（現在の四日市市水沢町一乗寺）の住職「玄庵」が、延喜年間（西暦 901～922 年）に空海直伝の製茶法を伝承し、この地域に茶樹を栽植したのが始まりと伝えられている。



坂本棚田

坂本の棚田は、平成11年7月に「日本の棚田百選」に選ばれた。この棚田が作られた歴史は定かではないが、この地に人が入った戦国時代に開墾されたものといわれており、法面が石積みの珍しい棚田である。現在は、面積約23ha、440枚の田を地元の人たちが一生懸命守っている。春には坂本棚田野上がりまつりが開催される。

(3) 下流域の自然環境

鈴鹿川の下流域は沖積平野となり、水田や市街地が広がっている。

河口部には、干潟や砂浜海岸が見られ、特に鈴鹿川と鈴鹿川派川の間に連なる吉崎海岸は、砂浜の少なくなった三重県の海岸において、北部の高松海岸とともに昔からの姿を持っている美しい砂浜の海岸が広がっている。



高岡山城跡公園から見た鈴鹿川

鈴鹿市の市街地や田園風景が見られ、下流域の景観を特徴づけている。



吉崎海岸（四日市市）

吉崎海岸は、北勢地方では高松海岸とともに海浜植生が残存する貴重な半自然砂浜海岸である。河口幅 400m の鈴鹿川とその上流 4.5 km 鈴鹿市一宮町付近で分岐し約 4 km の流路を有する派川に挟まれた三角州状海岸平野の地先長さ 2.5 km の差堆である。砂堆幅は数 10m から 100 m で、比高 5m ほどの堤防下に後浜、前浜さらに水深 6m ほどの堆積台である沖浜へ漸移する。後浜は海浜植生が豊かであり幅も広い。近時は車の進入を禁止して野鳥等の保護に努めている。

2-2 河川及びその周辺の自然環境

1) 河川の自然環境

鈴鹿川流域の流域区分は、前記したように地形、地質、植生、土地利用の特徴から大きく3つに区分される。河川の自然環境は、これに潮の干満の影響をうける河口部を加えた4区分に大別できる。

(1) 上流部の自然環境

上流部は急峻な鈴鹿山脈に渓谷を刻みながら流下し、支川の上流域に見られる石水渓や小岐須渓谷、宮妻峡などの豊かな渓谷美が景勝地となり、キャンプやハイキング、溪流釣りの場として利用されている。

このような環境のもと、清流を好むアマゴやヒダサンショウウオ、モリアオガエルなども生息・繁殖している。



小岐須渓谷（鮎止めの滝）

野登山、仙ヶ岳に囲まれた御幣川上流の約4kmの渓谷。鮎止めの滝、屏風岩などの景勝地やキャンプ場、山の家があり、野外研修等にも利用されている。

(2) 中流部の自然環境

中流部は、砂礫河原、瀬や淵などを形成しながら流れ、水際にはツルヨシが生育するなど、自然豊かな水際環境が残されている。礫河床にはアカザ、オイカワ、ヨシノボリなどが生息・繁殖し、砂礫河原にはイカルチドリ、イソシギなど砂礫河原を好む鳥類などが生息・繁殖している。

また、支川安楽川の中流部では、国の天然記念物に指定されているネコギギの生息も報告されている。

また、高水敷にはところどころ河畔林が見られ、ヒヨドリなど、河畔林を利用する鳥類などが生息・繁殖している。



砂礫河原（亀山橋下流）



イカルチドリ



アカザ

(3)下流部の自然環境

下流部は川幅が広がり、比較的ゆるやかな流れとなっており、オイカワやカワムツ、カワヨシノボリなどが多く生息している。

また、ところどころ砂州が発達し、水際にはツルヨシが繁茂している。このような環境を反映し、コアジサシやシロチドリなど、砂地に依存する鳥類が生息・繁殖しているほか、ツルヨシ等の草地にはカヤネズミやオオヨシキリが生息・繁殖している。

高水敷にはメダケ林やムクノキ・エノキ群落、ヤナギ林などからなる河畔林が点在しており、このような河畔林はムクドリやサギ類の休息地などとして利用されている。

さらに、鈴鹿川第一頭首工による湛水域が存在し、冬季にはカモ類の休息、採餌場となっている。一方、頭首工等の横断工作物により落差が存在し、魚類の遡上範囲が分断されている。



発達した砂州（^{しょうの}庄野橋上流）



鈴鹿川第二頭首工魚道の状況



サギ類のねぐら（鈴鹿川第一頭首工上流）

(4)河口部の自然環境

鈴鹿川及び鈴鹿川派川の河口部にはボラ、ビリンゴ、マハゼ等の汽水・海水魚が生息するほか、水際の塩沼地にはアイアシ、シオクグ等の塩沼植物やヨシ群落が分布し、オオヨシキリやアシハラガニ等の生育・繁殖場となっている。

また、河口付近には干潟が形成され、ゴカイ等の干潟特有の生物が生息・繁殖しているほか、冬季にはカモ類、春季や秋季にはシギ・チドリ類が多く飛来し、鳥類の休息場や渡りの中継地となっていることから、環境省により「日本の重要湿地 500」に選定されている。



鈴鹿川派川干潟の鳥類休息場



河口部の植生（アイアシ群落）

(5)内部川の自然環境

内部川は、頭首工が連続し、湛水域を形成している。河道内には砂礫河原が発達し、水際にはツルヨシが繁茂している。このような環境を反映し、砂礫河原を好むシロチドリやイカルチドリなどが生息・繁殖している。一方、外来種であるアレチウリの侵入・拡大も見られ、在来植生への影響が懸念される。



河原田用水堰の湛水域（内部川 2.6k 付近）



砂礫河原（内部川 3.6k 付近）

(6)安楽川の自然環境

安楽川は、砂礫河原が発達し、水際にはツルヨシが繁茂している。左右岸にはマダケ林からなる河畔林が連続しており、サギ類の休息地として利用されている。また、国内外来種であるギギが生息しており、在来種であるネコギギの生息・繁殖環境への影響が懸念される。



砂礫河原と河畔林（安楽川 1.0k 付近）

2)動植物の生息状況

(1)鈴鹿川流域に生息・生育する生物

鈴鹿川の大正管理区間には、河口部の干潟や塩性湿地、下流部～中流部にかけての砂礫河原や水際の草地、河畔林など、様々な環境が見られる。鈴鹿川ではこれらの環境に依存した様々な生物が生息・生育している。

①魚類

鈴鹿川では、全川的にオイカワ、カワヨシノボリが多く生息している。

河口部の感潮区間では、ビリンゴ、マハゼ、ボラ等の汽水・海水魚が多く確認されている。また、アユやカマキリ等の回遊魚は鈴鹿川第二頭首工より下流で確認されており、それより上流では確認個体数は少なくなっている。

中流部においては、カワムツやタモロコ、タカハヤなどの生息も確認されている。また、水の比較的きれいな場所に生息するアカザやスナヤツメが確認されている。



オイカワ



スナヤツメ

②底生動物類

河口部では貝類や甲殻類、ゴカイ類が主体であるが、それより上流では水生昆虫が主体でカゲロウ目、トンボ目、トビケラ目、ハエ目、コウチュウ目が多く生息している。

代表的な出現種としては、河口部では汽水域に依存するゴカイ、ケフサイソガニ、アシハラガニなどが生息している。下流部～中流部の緩流部にはシロハラコカゲロウやキイロカワカゲロウ、モノアラガイ、早瀬にはヒゲナガカワトビケラ、早瀬～平瀬にはヨシノマダラカゲロウ、オオマダラカゲロウなどが生息している。

③植物

河口部では汽水域であることを反映して、塩沼植物群落のアイアシ群集や砂丘植物群落のコウボウムギ群集、ハマヒルガオ群落が分布し、ヨシ群落も見られる。また広い砂州に外来種のシナダレスズメガヤが広く群落を形成している。

下流部の高水敷は公園整備されているところが多くみられる。整備されていない高水敷にはメダケ群集やクズ群落、マダケ植林、ムクノキ-エノキ群集などが広がり、低水敷にはクズ群落の他、特定外来生物のアレチウリが広く群落を形成している。水際には

ツルヨシ群集が分布するほか、広い砂礫裸地が見られる。

中流部では、コゴメヤナギ群集、カワラヨモギーカワラハハコ群落、ヒメムカシヨモギーオオアレチノギク群落といった掃流の影響を受ける砂礫地特有の群落がみられ、中流部よりも河床勾配が高く流速が速いことを反映していると考えられる。

内部川は、高水敷にはセイタカアワダチソウ群落、クズ群落、カナムグラ群落、特定外来生物のアレチウリ群落などが広がっている。低水敷にはアレチウリ群落、カナムグラ群落、ツルヨシ群集が広がっている。また、2.8km より上流ではマダケ植林、ハチク植林、メダケ群集といった河畔林がみられるようになり、低水敷にはツルヨシ群集などが分布している。

鈴鹿川派川は、河口部は汽水域であることを反映して、塩沼植物群落のアイアシ群集やヨシ群落、シオクグ群落、砂丘植物群落のコウボウムギ群落、ハマヒルガオ群落、ハマゴウ群落が分布する。また海辺に特有なテリハノイバラ群落もみられる。

河畔にはメダケ群集が带状に連続する他、カナムグラ群落、セイタカアワダチソウ群落、クズ群落などが広がっている。



ヨシ群落
(鈴鹿川 0.7k 付近)



カワラヨモギーカワラハハコ群落
(鈴鹿川 21.4k 付近)

④鳥類

全川で見ると、カワウ、サギ類、カモ類、セキレイ類、ホオジロ、スズメなどが多く生息している。

河口部では、河川内に低木は点在するがまとまった樹林はなく、カワウやサギ類、カモ類、カモメ類など水辺の陸鳥、ヨシに強く依存するオオジュリンやオオヨシキリ、草地に多いホオジロやヒバリ、スズメやムクドリなどの市街地に適応した鳥類が主に生息している。このほか、カンムリカイツブリ、スズガモ、ホオジロガモ、ミサゴ、ヒクイナ、ミヤコドリ、トウネン、ハウロクシギ、チュウシャクシギなど、海域から汽水域に生息する種が多く生息している。

下流部では、カワウ、サギ類、ホオジロ、スズメ、カワラヒワなどが多く生息している。また、広い砂地にはコアジサシやシロチドリなどが確認されている。

中流部には、イカルチドリ、イソシギ、セキレイ類、ヒヨドリ、ホオジロ、カワラヒ

ワなどが生息しており、礫地に生息するイカルチドリや、様々な樹林地に生息するヒヨドリが特徴的である。また、樹林に生息するクロツグミ、イカル、ニューナイスズメも確認されている。

内部川では、カルガモ、イカルチドリ、セグロセキレイ、ドバト、ホオジロ、スズメなどが生息し、様々な環境に生息する鳥類が確認されている。



イソシギ



スズガモ

⑤両生類・爬虫類・哺乳類

下流部の高茎草地が広く見られる箇所では、草地環境への依存性が高いカヤネズミの巣が確認されている。淀みが見られる箇所では、トノサマガエルやウシガエルなどのカエル類が多く出現している他、シュレーゲルアオガエルも生息している。

中流部ではホンドジカの足跡が確認されたほか、河川上流部の開けた場所に生息するカジカガエルが生息している。

⑥陸上昆虫類

鈴鹿川に生息する陸上昆虫類は、河道内に見られるツルヨシ等の植生やヤナギ、エノキームクノキ等からなる河畔林、砂礫河原といった環境など、様々な環境を反映した種が生息している。

下流部の草地が広がっている箇所には、スズムシ、ハラオカメコオロギ、ヒメコオロギ、ショウリョウバッタなどのバッタ目、ウズラカメムシ、マルカメムシなどのカメムシ目、イチモンジセセリ、モンキチョウ、ウスオエダシャクなどのチョウ目、コウチュウ目のナナホシテントウ、ヨモギハムシなどの草地性の種が中心となっている。また、ヤナギ林には、コクワガタ、ヒラタクワガタ、シロテンハナムグリ、オオスズメバチなどの樹林性の昆虫類が生息している。

砂礫河原には、ミズギワコメツキ類、スナゴミムシダマシ類などの砂礫地に生息する種が生息し、水辺に依存するハグロトンボ、ゲンゴロウ類、ガムシ類なども比較的多く確認されている。

中流部では、エルモンヒラタカゲロウ、アオサナエ、トビケラ類などの清流性の昆虫類も生息している。

内部川では、主に草地と砂礫地が広がる環境であり、コモリグモ類、ハラオカメコオロギ、ヒメコオロギなどのバッタ類、ツノトンボ、ナナホシテントウ、ヨモギハムシなどの草地性昆虫類が占めている。また、砂礫地ではヒメサビキコリやスナゴミムシダマシ類がみられる。その他、左岸側に山林が隣接しているので、コクワガタ、オオスズメバチなどの樹林性の昆虫類も確認されている。

(2) 鈴鹿川における貴重な種

鈴鹿川における貴重な種は、河川水辺の国勢調査における現地調査確認種をもとに以下の基準で選定した。

【「重要種」の選定に用いた文献】

- ・「文化財保護法」「文化財保護条例」における国、都道府県、市町村指定天然記念物
- ・「絶滅のおそれのある野生動植物の種の保存に関する法律」の国内希少野生動植物種および緊急指定種
- ・環境省編「改訂・日本の絶滅のおそれのある野生生物ーレッドデータブック」掲載種または、環境省編「レッドリスト」掲載種
- ・地方版レッドデータブック
 - 「三重県レッドリスト 2005」(2005:三重県環境森林部自然環境室)掲載種
 - 改訂・近畿地方の保護上重要な植物ーレッドデータブック近畿 2001ー(2001:レッドデータブック近畿研究会)掲載種
 - または、近畿地区鳥類レッドデータブック
 - (2002:近畿鳥類レッドデータブック研究会)掲載種

既往の河川水辺の国勢調査により確認された種のうち、魚類 11 種、底生動物 15 種、植物 19 種、爬虫類 2 種、鳥類 66 種、陸上昆虫類 25 種が重要種として確認された。

■鈴鹿川で確認された魚類の重要種一覧表

種名	指定区分	確認場所
スナヤツメ	環レ(VU)、新環レ(VU)、三重レ(VU)	鈴鹿川中流部
ウナギ	新環レ(DD)	鈴鹿川下流部、鈴鹿川中流部、内部川
ゲンゴロウブナ	新環レ(NT)	鈴鹿川下流部
ホトケドジョウ	環レ(EN)、新環レ(EN)、三重レ(VU)	内部川、足見川
アカザ	環レ(VU)、新環レ(VU)、三重レ(VU)	鈴鹿川中流部
メダカ	環レ(VU)、新環レ(VU)、三重レ(NT)	鈴鹿川下流部、鈴鹿川中流部、内部川、椋川、芥川、足見川
カマキリ	新環レ(VU)	鈴鹿川下流部
ウツセミカジカ	環レ(VU)、新環レ(EN)	鈴鹿川下流部
ヒモハゼ	新環レ(NT)	鈴鹿川下流部
エドハゼ	環レ(EN)、新環レ(VU)	鈴鹿川下流部
アシシロハゼ	三重レ(EN)	鈴鹿川下流部

環レ・・・環境省編「改訂・日本の絶滅のおそれのある野生生物―レッドデータブック（汽水・淡水魚類；2003）」掲載種

EN・・・絶滅危惧ⅠＢ類 VU・・・絶滅危惧Ⅱ類

新環レ・・・環境省新レッドリスト（2007）

EN・・・絶滅危惧ⅠＢ類、VU・・・絶滅危惧Ⅱ類、NT・・・準絶滅危惧、DD・・・情報不足

三重レ・・・「三重県レッドリスト 2005」掲載種

EN・・・絶滅危惧ⅠＢ類 VU・・・絶滅危惧Ⅱ類

NT・・・準絶滅危惧種

出典：平成 5 年度 河川水辺の国勢調査 鈴鹿川水系魚類調査報告書

平成 6 年度 河川水辺の国勢調査 鈴鹿川水系魚類調査報告書

平成 10 年度 河川水辺の国勢調査 鈴鹿川水系魚類調査報告書

平成 15 年度 河川水辺の国勢調査 鈴鹿川水系魚類調査報告書

■鈴鹿川で確認された底生動物の重要種一覧表

種名	指定区分	確認場所
マルタニシ	環レ(NT)、新環レ(NT)、三重レ(NT)	鈴鹿川下流部
オオタニシ	新環レ(NT)	鈴鹿川下流部
ムシヤドカリカワザンショウガイ	新環レ(NT)	鈴鹿川下流部
ヨシダカワザンショウガイ	新環レ(VU)	鈴鹿川下流部
オカミミガイ	三重レ(NT)	鈴鹿川下流部
コシダカヒメモノアラガイ	環レ(DD)	鈴鹿川下流部
モノアラガイ	環レ(NT)、新環レ(NT)、三重レ(NT)	鈴鹿川中流部、内部川
ナガオカモノアラガイ	環レ(NT)、新環レ(NT)、三重レ(NT)	鈴鹿川下流部
ヤマトシジミ	新環レ(NT)	鈴鹿川下流部
アサリ	新環レ(NT)	鈴鹿川下流部
ハマガニ	三重レ(DD)	鈴鹿川下流部
アリアケモドキ	三重レ(VU)	鈴鹿川下流部
キボシケシゲンゴロウ	三重レ(NT)	鈴鹿川中流部
ヒメシマチビゲンゴロウ	三重レ(DD)	鈴鹿川中流部
ゴマダラチビゲンゴロウ	三重レ(DD)	内部川

環レ・・・環境省編「改訂・日本の絶滅のおそれのある野生生物―レッドデータブック（陸・淡水産貝類；2005、クモ形類・甲殻类等；2006）」掲載種

VU・・・絶滅危惧Ⅱ類 NT・・・準絶滅危惧種 DD・・・情報不足

新環レ・・・環境省新レッドリスト（2006；甲殻类等、2007；陸・淡水産貝類）掲載種

VU・・・絶滅危惧Ⅱ類 NT・・・準絶滅危惧種

三重レ・・・「三重県レッドリスト 2005」掲載種

VU・・・絶滅危惧Ⅱ類 NT・・・準絶滅危惧種 DD・・・情報不足

出典：平成 5 年度 河川水辺の国勢調査 鈴鹿川水系底生動物調査報告書

平成 10 年度 河川水辺の国勢調査 鈴鹿川水系底生動物調査報告書

平成 15 年度 河川水辺の国勢調査 鈴鹿川水系底生動物調査報告書

■鈴鹿川で確認された植物の重要種一覧表

種名	指定区分	確認場所
ハルニレ	三重レ (EN)、近レ	鈴鹿川派川
ノダイオウ	環レ (VU)、新環レ (NT)、近レ	内部川
ハマアカザ	三重レ (EN)、近レ	鈴鹿川派川
ハママツナ	三重レ (NT)、近レ	鈴鹿川派川
ユキヤナギ	三重レ (DD)、近レ	鈴鹿川中流部
ハマボウ	三重レ (VU)、近レ	鈴鹿川派川
ゴギゾル	三重レ (EN)	鈴鹿川下流部
ハマボウフウ	近レ	鈴鹿川下流部、鈴鹿川派川
カラタチバナ	三重レ (NT)	鈴鹿川中流部
ハマサジ	環レ (VU)、新環レ (NT)、三重レ (NT)、近レ	鈴鹿川派川
ミゾコウジュ	環レ (NT)、新環レ (NT)、三重レ (VU)、近レ	鈴鹿川下流部、内部川
シソクサ	近レ	鈴鹿川下流部
カワヂシャ	環レ (NT)、新環レ (NT)、三重レ (DD)、近レ	鈴鹿川下流部、鈴鹿川中流部、内部川
カワラハハコ	三重レ (VU)、近レ	鈴鹿川中流部
フクド	新環レ (NT)、三重レ (VU)、近レ	鈴鹿川派川
ホシクサ	近レ	鈴鹿川中流部
ヤマラッキョウ	自公	内部川
アイアシ	三重レ (VU)、近レ	鈴鹿川派川
シオクグ	近レ	鈴鹿川派川

環レ…環境省「日本の絶滅のおそれのある野生生物ーレッドデータブック（植物；2000）」掲載種

VU…絶滅危惧Ⅱ類、NT…準絶滅危惧

新環レ…環境省新レッドリスト（2007）掲載種

NT…準絶滅危惧

三重レ…「三重県レッドリスト 2005」掲載種

EN…絶滅危惧ⅠB類 VU…絶滅危惧Ⅱ類

NT…準絶滅危惧種 DD…情報不足

近レ…改訂・近畿地方の保護上重要な植物ーレッドデータブック近畿 2001ー 掲載種

自公…「自然公園法」による指定植物

出典：平成 4 年度 河川水辺の国勢調査 鈴鹿川水系植物調査報告書

平成 8 年度 河川水辺の国勢調査 鈴鹿川水系植物調査報告書

平成 13 年度 河川水辺の国勢調査 鈴鹿川水系植物調査報告書

■鈴鹿川で確認された爬虫類の重要種一覧表

種名	指定区分	確認場所
スッポン	環レ (DD)、新環レ (DD)、三重レ (DD)	鈴鹿川中流部
イシガメ	新環レ (DD)	鈴鹿川下流部、鈴鹿川中流部、内部川

環レ…環境省（庁）編「日本の絶滅のおそれのある野生生物ーレッドデータブック（爬虫類・両生類；2000）」掲載種

DD…情報不足

出典：平成 16 年度 河川水辺の国勢調査 鈴鹿川水系両性類・爬虫類・哺乳類調査報告書

新環レ…環境省新レッドリスト（2007）

DD…情報不足

三重レ…「三重県レッドリスト 2005」掲載種

DD…情報不足

■鈴鹿川で確認された鳥類の重要種一覧表

種名	指定区分	確認場所
カンムリカイツブリ	近レ	鈴鹿川下流部
カワウ	緑1	鈴鹿川下流部、鈴鹿川中流部、内部川
ササゴイ	三重レ(VU繁殖)、近レ	鈴鹿川下流部
チュウサギ	環レ(NT)、新環レ(NT)、三重レ(VU繁殖)、近レ	鈴鹿川下流部、鈴鹿川中流部、内部川、安楽川
マガモ	近レ	鈴鹿川下流部、鈴鹿川中流部、内部川、鈴鹿川派川
トモエガモ	環レ(VU)、新環レ(VU)、三重レ(EN越冬)、近レ	鈴鹿川派川
ヨシガモ	近レ	鈴鹿川下流部
ビロードキンクロ	近レ	鈴鹿川下流部
ホオジロガモ	近レ	鈴鹿川下流部
ウミアイサ	近レ	鈴鹿川下流部
ミサゴ	環レ(NT)、新環レ(NT)、三重レ(EN繁殖・VU越冬)、近レ	鈴鹿川下流部、鈴鹿川派川
ハチクマ	環レ(NT)、新環レ(NT)、三重レ(EN繁殖)、近レ	鈴鹿川下流部
オオタカ	保存、環レ(VU)、新環レ(NT)、三重レ(VU留鳥)、近レ	鈴鹿川下流部、鈴鹿川中流部
ハイタカ	環レ(NT)、新環レ(NT)、三重レ(NT越冬)、近レ	鈴鹿川下流部
サシバ	三重レ(EN繁殖)、近レ	鈴鹿川中流部
ハヤブサ	保存、環レ(VU)、新環レ(VU)、三重レ(CR繁殖・EN越冬)、近レ	鈴鹿川下流部、鈴鹿川中流部
チョウゲンボウ	三重レ(EN越冬)、近レ	鈴鹿川下流部
クイナ	三重レ(NT越冬)、近レ	鈴鹿川派川
ヒクイナ	三重レ(VU繁殖)、近レ	鈴鹿川下流部
コチドリ	三重レ(EN繁殖)、近レ	鈴鹿川下流部、鈴鹿川中流部
イカルチドリ	三重レ(VU繁殖・NT越冬)、近レ	鈴鹿川下流部、鈴鹿川中流部、内部川
シロチドリ	三重レ(EN繁殖・NT越冬)、近レ	鈴鹿川下流部、鈴鹿川派川
メダイチドリ	近レ	鈴鹿川下流部、鈴鹿川派川
ムナグロ	近レ	鈴鹿川派川
ダイゼン	近レ	鈴鹿川下流部、鈴鹿川派川
タゲリ	三重レ(VU)、近レ	鈴鹿川下流部
キョウジョシギ	近レ	鈴鹿川下流部、鈴鹿川派川
トウネン	近レ	鈴鹿川下流部、鈴鹿川派川
オジロトウネン	三重レ(DD越冬)、近レ	鈴鹿川下流部
ウズラシギ	近レ	鈴鹿川派川
ハマシギ	近レ	鈴鹿川下流部、鈴鹿川派川
ミユビシギ	三重レ(NT越冬)、近レ	鈴鹿川派川
アオアシシギ	近レ	鈴鹿川下流部、鈴鹿川中流部、鈴鹿川派川
クサシギ	近レ	鈴鹿川下流部、鈴鹿川中流部、内部川
キアシシギ	近レ	鈴鹿川下流部、鈴鹿川中流部、鈴鹿川派川
イソシギ	近レ	鈴鹿川下流部、鈴鹿川中流部、内部川、鈴鹿川派川
ソリハシシギ	近レ	鈴鹿川下流部、鈴鹿川派川
オオソリハシシギ	近レ	鈴鹿川下流部
ホウロクシギ	環レ(VU)、新環レ(VU)、三重レ(NT通過)、近レ	鈴鹿川下流部
チュウシャクシギ	近レ	鈴鹿川下流部、鈴鹿川派川
タシギ	近レ	鈴鹿川下流部、鈴鹿川中流部
オオセグロカモメ	近レ	鈴鹿川下流部
コアジサシ	環レ(VU)、新環レ(VU)、三重レ(EN繁殖)、近レ	鈴鹿川下流部、鈴鹿川派川
アオバト	近レ	鈴鹿川下流部
ホトトギス	近レ	鈴鹿川中流部
フクロウ	近レ	鈴鹿川中流部
ヤマセミ	近レ	鈴鹿川下流部、鈴鹿川中流部
カワセミ	近レ	鈴鹿川下流部、鈴鹿川中流部、内部川
アリスイ	近レ	鈴鹿川下流部

種名	指定区分	確認場所
ハクセキレイ	近レ	鈴鹿川下流部、鈴鹿川中流部、内部川
ビンズイ	近レ	鈴鹿川下流部、鈴鹿川中流部
サンショウクイ	環レ(VU)、新環レ(VU)、三重レ(VU通過)、近レ	鈴鹿川中流部
ノビタキ	近レ	鈴鹿川下流部、鈴鹿川中流部
イソヒヨドリ	近レ	鈴鹿川下流部
クロツグミ	三重レ(NT繁殖)、近レ	鈴鹿川中流部
アカハラ	近レ	鈴鹿川中流部
オオヨシキリ	三重レ(NT繁殖)、近レ	鈴鹿川下流部、鈴鹿川中流部、内部川
セッカ	近レ	鈴鹿川下流部、内部川
コサメビタキ	三重レ(DD繁殖)、近レ	鈴鹿川中流部
ホオアカ	近レ	鈴鹿川下流部
ミヤマホオジロ	近レ	鈴鹿川下流部、鈴鹿川中流部、内部川
ノジコ	環レ(NT)、新環レ(NT)、三重レ(DD越冬)	鈴鹿川中流部
アオジ	近レ	鈴鹿川下流部、鈴鹿川中流部、内部川
ベニマシコ	近レ	鈴鹿川下流部、鈴鹿川中流部
シメ	近レ	鈴鹿川下流部、鈴鹿川中流部
コムクドリ	近レ	鈴鹿川中流部

保存・・・「絶滅のおそれのある野生動植物の種の保存に関する法律」の国内希少野生動植物種および緊急指定種

環レ・・・環境省編「改訂・日本の絶滅のおそれのある野生生物ーレッドデータブック（鳥類；2002）」掲載種

VU・・・絶滅危惧Ⅱ類 NT・・・準絶滅危惧種

新環レ・・・環境省新レッドリスト（2007）

VU・・・絶滅危惧Ⅱ類 NT・・・準絶滅危惧種

三重レ・・・「三重県レッドリスト 2005」掲載種

EN・・・絶滅危惧ⅠB類 CR+EN・・・絶滅危惧Ⅰ類 VU・・・絶滅危惧Ⅱ類 NT・・・準絶滅危惧種

DD・・・情報不足

近レ・・・近畿地区鳥類レッドデータブック掲載種

出典：平成7年度 河川水辺の国勢調査 鈴鹿川水系鳥類調査報告書
平成8年度 河川水辺の国勢調査 鈴鹿川水系鳥類調査報告書
平成12年度 河川水辺の国勢調査 鈴鹿川水系鳥類調査報告書
平成17年度 河川水辺の国勢調査 鈴鹿川水系鳥類調査報告書

■鈴鹿川で確認された陸上昆虫類等の重要種一覧表

種名	指定区分	確認場所
オニグモ	三重レ(NT)	鈴鹿川下流部、鈴鹿川中流部
コガネグモ	三重レ(NT)	鈴鹿川下流部、鈴鹿川中流部、内部川
マルゴミグモ	三重レ(DD)	鈴鹿川下流部
ドヨウオニグモ	三重レ(NT)	鈴鹿川下流部、鈴鹿川中流部、内部川
カワベコモリグモ	三重レ(DD)	鈴鹿川下流部
イサゴコモリグモ	三重レ(VU)	鈴鹿川中流部
オビジガバチグモ	三重レ(DD)	鈴鹿川下流部
クチナガコオロギ	三重レ(NT)	鈴鹿川下流部
コオイムシ	三重レ(NT)	鈴鹿川中流部
トラフムシヒキ	三重レ(NT)	鈴鹿川中流部
アオメアブ	三重レ(DD)	鈴鹿川下流部、鈴鹿川中流部、内部川
オオイシアブ	三重レ(DD)	内部川

種名	指定区分	確認場所
スナハラゴミムシ	新環レ(NT)	鈴鹿川下流部
キベリマルクビゴミムシ	三重レ(EX)、新環レ(NT)	鈴鹿川下流部、鈴鹿川中流部、内部川
オオトックリゴミムシ	三重レ(EN)	鈴鹿川下流部
オオヒョウタンゴミムシ	環レ(NT)、新環レ(NT)、三重レ(VU)	鈴鹿川下流部
ゴマダラチビゲンゴロウ	三重レ(DD)	鈴鹿川下流部
ツマキレオナガミズスマシ	新環レ(NT)	鈴鹿川中流部
ヤマトモンシデムシ	三重レ(VU)、新環レ(NT)	鈴鹿川下流部、鈴鹿川中流部、内部川
マルエンマコガネ	三重レ(EN)	鈴鹿川下流部
シラホシハナムグリ	三重レ(VU)	鈴鹿川下流部
クロキオビジョウカイモドキ	三重レ(VU)	鈴鹿川中流部
クロスジイッカク	三重レ(NT)	鈴鹿川下流部
モンスズメバチ	三重レ(VU)	内部川
キアシハナダカバチモドキ	環レ(DD)	鈴鹿川下流部

環レ・・・環境省編「改訂・日本の絶滅のおそれのある野生生物－レッドデータブック（昆虫類；2006）」掲載種

VU・・・絶滅危惧Ⅱ類 NT・・・準絶滅危惧種 DD・・・情報不足

新環レ・・・環境省新レッドリスト（2007）掲載種

NT・・・準絶滅危惧

三重レ・・・「三重県レッドリスト 2005」掲載種

EX・・・絶滅 EN・・・絶滅危惧ⅠB類 VU・・・絶滅危惧Ⅱ類

NT・・・準絶滅危惧種 DD・・・情報不足

出典：平成 5 年度 河川水辺の国勢調査 鈴鹿川水系陸上昆虫類調査報告書

平成 9 年度 河川水辺の国勢調査 鈴鹿川水系陸上昆虫類調査報告書

平成 14 年度 河川水辺の国勢調査 鈴鹿川水系陸上昆虫類調査報告書

3) 鈴鹿川を特徴づける場所

地域の有識者からなる「鈴鹿川環境特性懇談会」※)において、鈴鹿川を特徴づける場所として以下の26箇所が抽出されている。

表2-1 鈴鹿川らしさ一覧表

No.	らしさのタイトル	具体的な場所	
1	河口の開けた景観	0～1.0km付近	磯津橋・鈴鹿本線の河口
2	豊かな植生が楽しめる小倉橋付近	2.0～2.5km付近	小倉橋付近
3	グラウンド付近のウグイの産卵場	3.～4.0km付近	内部川合流点～本郷橋
4	鈴鹿の歴史を偲ぶ風景	5.0km付近	鈴鹿川本川と派川の分派点
5	砂州の広がる高岡橋付近	6.5km付近	高岡橋付近
6	天然アユが遡上してくる木田橋付近	8.5km付近	木田橋付近
7	広い水面と河畔林のある第二頭首工付近	9.7km付近	第二頭首工付近
8	自然の中の親水空間	11.2～13.1km付近	定五郎橋～庄野橋
9	バードウォッチングの場	13.1～14.1km付近	庄野橋～汲川原橋
10	水害の歴史を伝える女人堤防の碑	14.4km付近	女人堤防
11	砂州と早瀬が見られる安楽川合流点付近	15.0km付近	安楽川との合流点
12	亀山市民の出会いの場	21.0～22.0km付近	亀山橋付近
13	情緒ある風情を創出している神辺橋付近	25.5km付近	神辺橋付近
14	昔ながらの自然が残されている加太川	加太川 1.0～5.0km付近	加太金場～加太市場
15	鈴鹿川の観光名所	アマタノ川 1.5～2.5km付近	名阪森林パーク
16	天然アマゴの生息する川	中津川全域	中津川
17	旧東海道脇に残された豊かな自然	34.0～38.0km付近	沓掛～坂下地先(鈴鹿川本川)
18	派川に残された貴重な干潟	鈴鹿川派川 0～1.0km付近	鈴鹿川派川の河口
19	河畔林と中州のある風景	鈴鹿川派川 1.0～2.0km付近	新五味塚橋～五味塚橋
20	内部川探検隊	内部川 4.0km付近	内部川・内部小前
21	四日市市のキャンプ村・宮妻峽	内部川 19.0km付近	宮妻峽
22	橋のたもとに広がる身近な親水空間	安楽川 0～3.5km付近	本線との合流点～御幣川合流点付近
23	小岐須溪谷・屏風岩	御幣川 9.2km付近より上流	小岐須溪谷
24	安楽川の曲流(アメンダー)	安楽川 9.0～10.2km付近	安楽川安楽
25	鈴鹿の山々に囲まれた溪谷美・石水溪	安楽川 15.5km付近	石水溪
26	鈴鹿川沿いに発達した文化伝播の道(古代・旧東海道)	-	

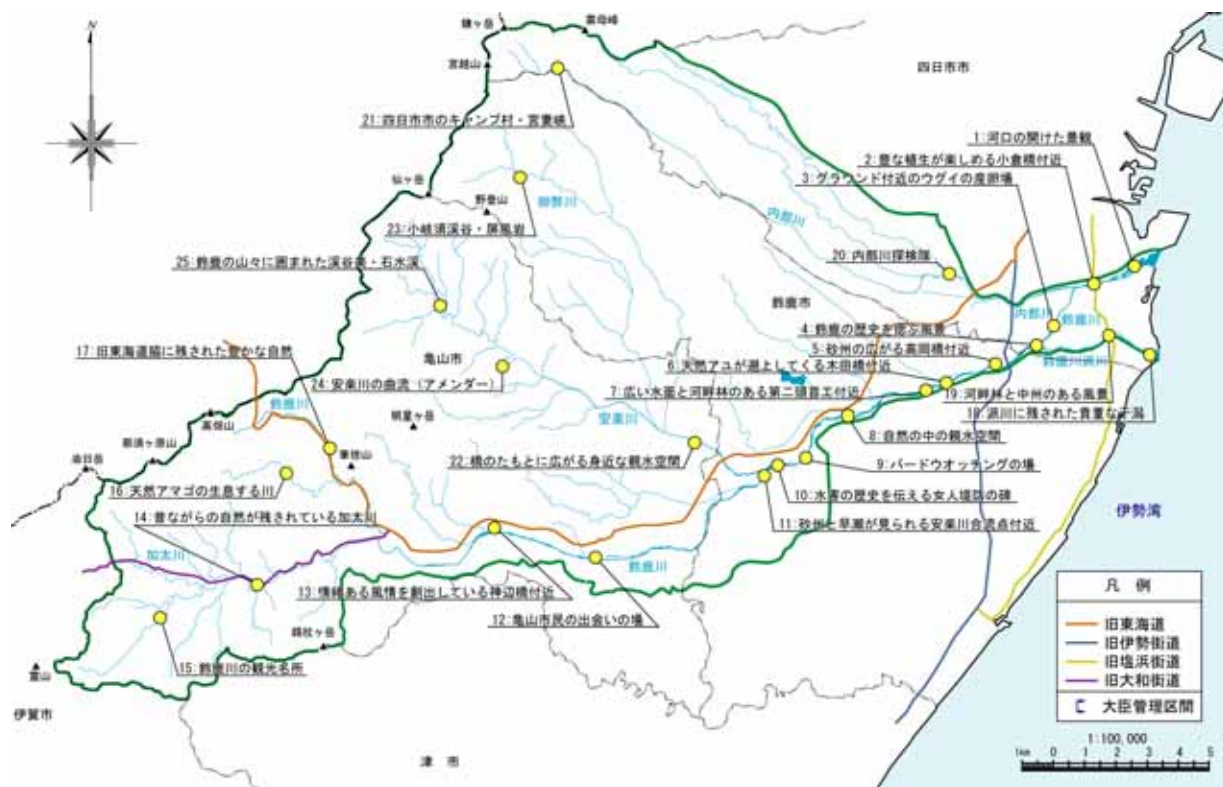


図2-2 鈴鹿川らしさ位置図

※) 鈴鹿川環境特性懇談会：平成10年～平成11年にかけて、鈴鹿川の周辺環境も含めた環境特性（生態系、景観、親水、歴史、文化等）の現状を再認識するとともに、鈴鹿川の河川特性（鈴鹿川らしさ）を抽出・分析し、望ましい河川環境を保全・創出していくため、鈴鹿川と深い関わりをもつ各分野の方々から様々な意見や情報を得るために開催された。

2-3 特徴的な河川景観や文化財等

鈴鹿川流域は、上流域が鈴鹿国定公園に指定されるほか、河口部には自然の砂浜海岸が広がるなど、優れた自然景観が点在している。

上流域では石水溪や小岐須溪谷などの溪谷美が特徴的であり、多くの人々が訪れる観光地にもなっている。中流域に入ると、水田とともに緩やかな丘陵地となり、茶園やサツキ等の花木を生産する畑が広がり、田園風景が広がっている。下流域は従来、水田として利用されてきたが、近年では都市化が進んでおり、田園風景と都市景観が調和した景観を形成している。河口部には干潟が広がるとともに、自然の砂浜海岸が残され、特徴的な景観を形成している。

流域内には古来より近江・大和方面への交通路となる東海道や大和街道が通り、宿場町が発達するなど、交通の要衝となっており、文化や物資・情報が交流し合うことから多くの文化財が存在している。このうち国及び県指定の史跡、名勝、天然記念物は 21 件（うち、国指定 5 件、県指定 16 件）が存在する（平成 18 年度現在）。

表 2-2 鈴鹿川流域の史跡、名勝、天然記念物指定一覧

No.	名称	指定区分	指定年月日	所在地
①	伊勢国分寺跡	国史跡	1922(T11)10.12	鈴鹿市国分町
②	王塚古墳	国史跡	1970(S45)5.11	鈴鹿市国府町
③	伊勢国府跡	国史跡	2002(H14)3.19	鈴鹿市広瀬町
④	石薬師の一里塚	県史跡	1937(T12)8.27	鈴鹿市上野町
⑤	白鳥塚古墳	県史跡	1937(S12)11.10	鈴鹿市石薬師町
⑥	石薬師の蒲ザクラ	県天然記念物	1939(S14)8.10	鈴鹿市上野町
⑦	西の城戸のヒイラギ	県天然記念物	1943(S18)7.9	鈴鹿市国府町
⑧	入道岳イヌツゲ及びアセビ群落	県天然記念物	1962(S37)2.14	鈴鹿市小岐須町
⑨	小岐須の屏風岩	県天然記念物	1965(S40)12.9	鈴鹿市小岐須町
⑩	川俣神社のスダジイ	県天然記念物	1969(S44)3.28	鈴鹿市庄野町
⑪	アイナシ	県天然記念物	1972(S47)4.1	鈴鹿市国府町
⑫	石大神	県天然記念物	1996(H8)3.7	鈴鹿市小社町
⑬	野村一里塚	国史跡	1934(S9)1.22	亀山市野村町
⑭	正法寺山荘跡	国史跡	1981(S56)1.24	亀山市関町鷺山
⑮	旧亀山城多聞櫓	県史跡	1953(S28)5.7	亀山市本丸町
⑯	峯城跡	県史跡	1969(S44)3.28	亀山市川崎町
⑰	鹿伏兎城跡	県史跡	1981(S56)3.30	亀山市加太市場
⑱	東の追分・西の追分	県史跡	1982(S57)4.27	亀山市関町木崎・新所
⑲	鈴鹿山の鏡岩	県天然記念物	1936(S11)1.22	亀山市関町坂下
⑳	宗英寺のイチョウ	県天然記念物	1937(S12)7.12	亀山市南野町
㉑	野登山のブナ林	県天然記念物	1956(S31)5.2	亀山市安坂山町



図2-3 鈴鹿川流域の史跡、名勝、天然記念物位置図

〔特徴的な河川景観〕

1：小岐須溪谷の屏風岩^{びょうぶ}

御幣川の一溪流にあり、秩父古生層の石灰岩を浸食してできたもので、溪流の兩岸には、約10メートルの白色糖状の石灰岩からなる垂直の岸壁がせまり、すばらしい景観となっている。この附近は、夏はキャンプ、春秋は、山登り、ハイキングに適しており、市民にいきいきのひとときを与えてくれるところである。屏風岩は昭和40年12月に三重県天然記念物の指定を受けている。



屏風岩

【出典：鈴鹿市勢要覧 95】

2：宮妻峽

入道ヶ岳^{にゅうどうがたけ}と雲母峰^{きららみね}に抱かれた内部川上流の渓谷にあり、目前には鈴鹿アルプスの槍と呼ばれ、登山者の憧憬の的となっている鎌ヶ岳の鋭鋒がそびえたっている。ここには市営のヒュッテ、バンガロー、テント村等の観光施設が整い、夏はキャンプ、春秋はピクニック、ハイキングに人々を集めている。



宮妻峽【出典：四日市観光協会 HP】

3：石水溪

鈴鹿川の支流安楽川の源流あたりにある渓谷。四季折々の自然が楽しめ、キャンプ村としても整備されており、夏季のレクリエーション地区としても利用されている。



石水溪
【出典：石水溪パンフレット(亀山市)】

4：不動明王と不動滝

仙ヶ岳の中腹に巨大な不動滝があり、水量の多い日は遠く 15 kmをはなれた亀山市外からも眺望され、そして不動滝の上部の岩壁には不動明王の巨像が刻まれている。



不動滝

5：大岡寺翫

東海道一の長い翫と言われる。江戸時代は松並木だったが、明治になり、枯れ松の跡に桜が植えられ、現在は桜並木となっている。松尾芭蕉^{まつおばしやう}は長い翫を旅して「から風の大岡寺繩手ふき通し、連れもちからもみな坐頭なり」と詠んだ。



大岡寺翫の桜
【出典：亀山市観光協会 HP】

2-4 河川にまつわる歴史・文化

鈴鹿川流域は、上流は亀山東方の八野の段丘から下流は高岡山に至る丘陵の上に、さらに神戸東方の沖積平野の上箕田遺跡など、海岸線近くまで弥生式遺跡が分布しており、古来より人々が定住していた。

3～4世紀の大和朝の国家統一期に入ると、水田はますます拡大され、下流の平野部のみならず、沿岸の氾濫により樹枝状に入り込む浸食谷にも水田が開拓された。この生産力と、それに養われる人口とを土台として発生した豪族らは、大和朝の影響を受けて、主として河川に臨む段丘、もしくは台地の縁辺に多くの墳墓を営造したことが推定され、河川と古墳の関係を如実に物語っている。

また、日本武尊^{やまとたけるのみこと}が東征からの帰路途中、能褒野^{のぼの}で亡くなったという記紀の記述から、能褒野陵は日本武尊の墓であるとされている。

「鈴鹿川、八十瀬渡りて誰ゆゑか、夜越に越えむ妻もあらなくに」と万葉集にも詠われているように、鈴鹿川は数多くの瀬を形成する砂河川である。上流部は山腹の荒廃が著しく、江戸時代の明和8年7月22日(1771年)～享和2年6月27日(1802年)間に多く風水害があったと記録が残るように、土砂流出が多く河道も安定しないことから下流部では洪水による氾濫を繰り返している。このため、人々は上流部の崩壊地に石堤を設けるなど現在でいう砂防工事を、下流部では築堤工事を行っている。この歴史を物語るものとして、この地域には女人堤防^{にょにん}なる話が伝えられている。なお、鈴鹿川の河道は、現在の地形から判断すると、かつては庄野～甲斐^{かい}あたりから神戸台地沿いに東に流れ、現在の金沢川^{かなざわ}、新田川^{にった}、二本木川^{にほんぎ}等に分派しながら流下していったことが伺われる。

鈴鹿川の名は、大海人王子^{おおあまのおうじ}（後の天武天皇^{てんむ}）が東国への旅の途中、洪水に難渋しているところに駅路鈴^{えきろのすず}をつけた鹿が現れ、その背に乗って川を渡ったという伝説から来たとされる。

1) 鈴鹿川にまつわる歴史、文化

① 古街道跡の旧跡

鈴鹿川流域内には、東海道、伊勢街道、塩浜街道^{しおばま}、大和街道の4つの街道が通り、近江や大和と伊勢などを結ぶ交通の要衝として栄えたことから、街道沿いに宿場町や一里塚など、様々な旧跡が残されている。

- ・ 永代常夜燈^{とこしる}、太神宮常夜燈^{おおみかみのみや}

永代常夜燈は寛政 11 年に江戸飛脚問屋からの寄進、太神宮常夜燈は文化 4 年に建てられた石階段付の常夜燈。



太神宮常夜燈

- ・ 石薬師の一里塚跡^{いしやくし}

鍋川左岸沿川に位置しており、江戸時代の初め、幕府が東海道を設定したときに一里毎に設けた塚の遺跡。石薬師宿の蒲川堤^{かばかわ}にあり、県史跡となっている。



石薬師の一里塚

- ・ 石薬師宿場町

旧東海道の宿場町で、弘法大師が靈石に薬師如来像を彫刻し西福寺に開眼供養して以来、石薬師寺と改称、尊号に因んだ宿場町となった。



野村一里塚

- ・ 野村一里塚^{のむら}

旧東海道の一里塚の一つ。東海道と伊勢別街道の分岐点であり、亀山宿を偲ぶ史跡として国史跡に指定されている。一の鳥居は保存状態がよく、当時の面影を良く残している。

- ・ 関宿の町並み

東海道伊勢別街道と伊賀街道に分岐する交通の要地として、現在の関町の町内を中心に早くから村落の発生をみた。旧東海道の宿場として、現在でも当時の面影をよく残している。



関宿の街並み

- ・ 東の追分、西の追分

本川左岸段丘上に位置し、街道の分岐点であった。東は伊勢別街道との分岐点、西は大和に向かう目印となっている。



②^{さだごろう}定五郎橋

鈴鹿市改築甲斐町には、かつて渡しがあり、石薬師と庄野の町から近いことから、人の往来が盛んであった。しかし、橋も舟もなく、人々は歩いて川の中を渡っていた。前川定五郎は、川を安全に渡れるよう、橋を架けることに尽力し、3回の架け替えにより、明治11年（1908年）にようやく本格的な橋が完成した。この橋は定五郎の功績をたたえて「定五郎橋」と名付けられた。

③女人堤防

かつて庄野付近の堤防がよく決壊したが、その頃は右岸側が神戸城下であったため、左岸堤の強化が許されなかった。禁じられた築堤を女人の手でひそかに敢行し村を水害から守った功績を讃え名づけられた。



女人堤防の碑

④^{すゐ}お諏訪おどり

18世紀前半に雨乞いの「お礼おどり」があったことが記録上確認でき、これが現在の「お諏訪おどり」と何らかの形で関係があったと考えられている。踊りは頭に花笠を被り、胸に締め太鼓をつけ手にバチをもって、もとは2人、現在は6人の踊り子が旋回しながら円を描いて踊る。周りには笛とほら貝及び唄い手がつく。現在では7月31日の夕方から足見田神社で水まつりの一部として行われている。



お諏訪おどり
【出典：四日市市 HP】

2) 鈴鹿川にまつわる伝統、伝説

① 竜ヶ池

寛文5年(1665)、伊船村の大庄屋真弓長左衛門治広氏が、年々干ばつに苦しむ農民の生活を救うため造ったため池である。長左衛門は私財を投げうって、東奔西走工事完成のため努力し、1日も休むことなく人夫を督励したが、工事半ばに出水により再度にわたって崩れてしまったので、あまりのことに占ってもらった所、水神の祟りであるから人柱をたてねばならぬと云われた。丁度その頃、どこからか来た竜と云う女の人がある百姓家に奉公していった工事に来ていた主人に弁当を持って来たのを見た人達が、彼女に一同の犠牲になってほしいと強く頼み、彼女はこれに同意したのでついに生きながら堤の下に埋められ人柱となった。このことがあってから後は、どの様な洪水にも崩れず完成したので竜ヶ池と名づけた。その後、この池に生息する魚は背中に瘤があったので、これは彼女が弁当を背負った姿であろうと伝えられている。



竜ヶ池

② 八百比尼塚

国府町の一部には、生れた赤子を橋の下に捨てる慣わしが残っている。これは八百姫塚の伝説に関係があり、昔、丹後の国に生れた少女が、何百年たっても年をとらず、尼となって伊勢神宮に参詣の帰途、この地に来て没した。

年八百八才あるいは八百八十才とも伝えられている。村民たちはこの霊を村の一隅に祭って、毎年四月八日に、八百姫明社の祭りを行う。現在八百姫塚の方は、手入れする人もいないらしく、うっそうと茂った雑木の間にあたご型の石が三基、わずかにその位置を示している。裏の崖下には小さな川があり、天の橋(尼の橋)とよばれる三メートル程の橋が下流に見える、この橋がいわゆる捨子の橋と云う、昔は非常に盛んで、子供が生れると必ず捨子をやったといわれる。

2-5 河川環境に関わる地域の活動

鈴鹿川流域に関連した活動として、次の活動が代表として挙げられる。

「水辺づくりの会 鈴鹿川のうお座」(平成14年11月発足)では、井尻頭首工の魚道改築や、流域の川魚文化に関する調査、ため池等の外来魚(ブラックバス、ブルーギル)の駆除、水系での魚の生態系調査など、鈴鹿川の豊かな河川環境の保全及び再生・創造をめざして独自活動や地域、行政機関への働きかけなど積極的な活動を行っている。

「市民情報ネットワークすずかのぶどう」(平成12年4月1日発足)は、鈴鹿地域の非営利な市民活動の情報ネットワークの構築、運営を行い、団体及び個人の市民活動環境を整備し、地域の発展に寄与することを目的として活動している。活動の中では、やすらぎくんネットと称して、鈴鹿川流域の環境展など、三重県議会議員立法の条例をもとに平成12年6月12日設立、平成18年3月2日をもって終了した「鈴鹿・亀山生活創造圏ビジョン推進会議」(やすらぎくん)の理念を引き継いだ活動も行っている。

2-6 自然公園等の指定状況

鈴鹿川の上流域は鈴鹿山脈が連なり、豊かな山岳景観や溪流環境を有することから、鈴鹿国定公園に指定されている。流域内では、内部川上流の宮妻峡・御幣川上流の小岐須溪谷・安楽川上流の石水溪等に、溪谷美を背景にキャンプ場の施設が整備され、四季を通じて行楽の賑わいを見せている。

また、流域内には5箇所が鳥獣保護区に指定されている。

表2-3 鈴鹿川流域自然公園等の指定状況

種別	公園名	指定年月日	関係市町	公園面積 (ha)	公園の特色
国定公園	鈴 鹿	昭和43年7月22日	四日市市、鈴鹿市、亀山市 いなべ市、菰野町、伊賀市	12,708	山岳景観、ニホンカモシカ、 自然林溪谷、湯の山温泉、 キリシマミドリシジミ

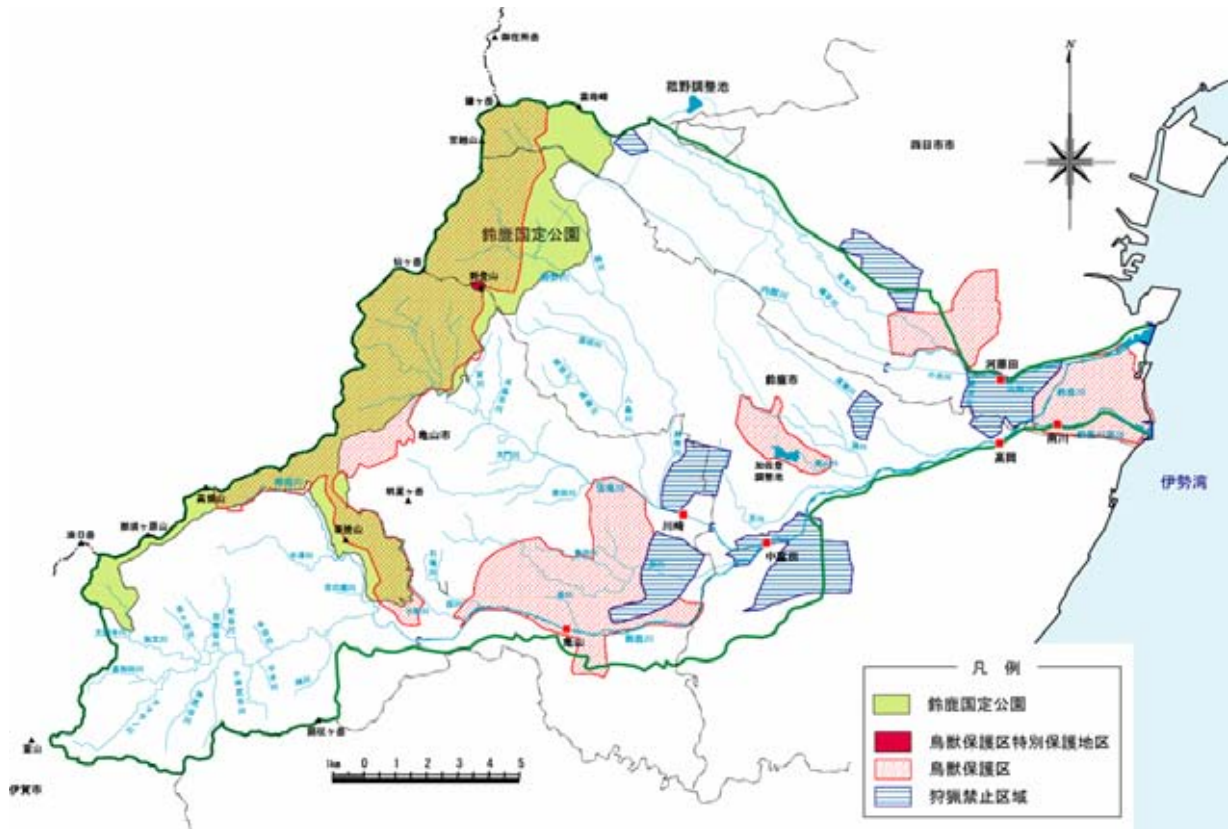


図2-5 自然公園等位置図

第3章 流域の社会条件

3-1 人口

鈴鹿川の流域は、四日市市、鈴鹿市、亀山市の3市で構成されており、沿川市の人口は約13万人（平成17年）となっている。

経年的にみると、四日市市を中心に人口は増加傾向にある。

表3-1 鈴鹿川沿川市町人口の推移

単位:人

地 区		平成2年	平成7年		平成12年		平成17年	
		人口	人口	増減	人口	増減	人口	増減
四日市市	河原田、内部、小山田、水沢の各地区	25,057	27,434	2,377	28,478	1,044	42,557	3,082
	旧楠町全域	10,835	10,844	9	10,997	153		
鈴鹿市	国府、庄野、加佐登、石薬師、井田川、久間田、椿、深伊沢、鈴峰、庄内の各地区	40,421	42,486	2,065	42,432	-54	43,073	641
亀山市	旧亀山市全域	37,632	38,631	999	39,334	703	49,253	2,647
	旧関町全域	7,413	7,497	84	7,272	-225		
合 計		121,358	126,892	5,534	128,513	1,621	134,883	6,370

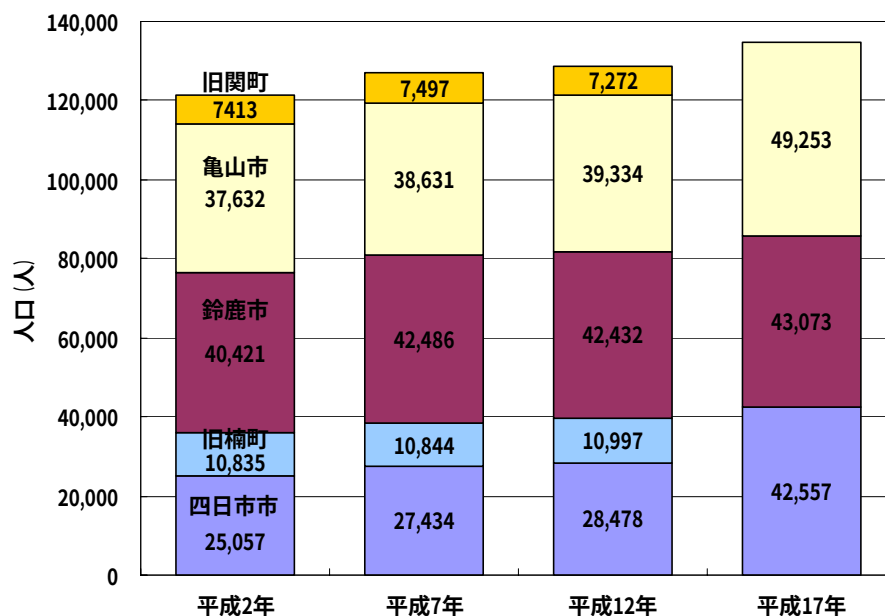


図3-1 沿川市町人口の推移

【出典：国勢調査】
 (ただし、平成17年四日市市は住民基本台帳による値)

3-2 土地利用

鈴鹿川流域の土地利用は、山地等が約 59%、水田や田畑等の農地が約 31%、宅地等の市街地が約 10%となっている。市街地は下流の四日市市を中心に広がり、農地は下流～中流部に広がっている。

上流部は山地となっており、山林面積の比率が高くなっている。

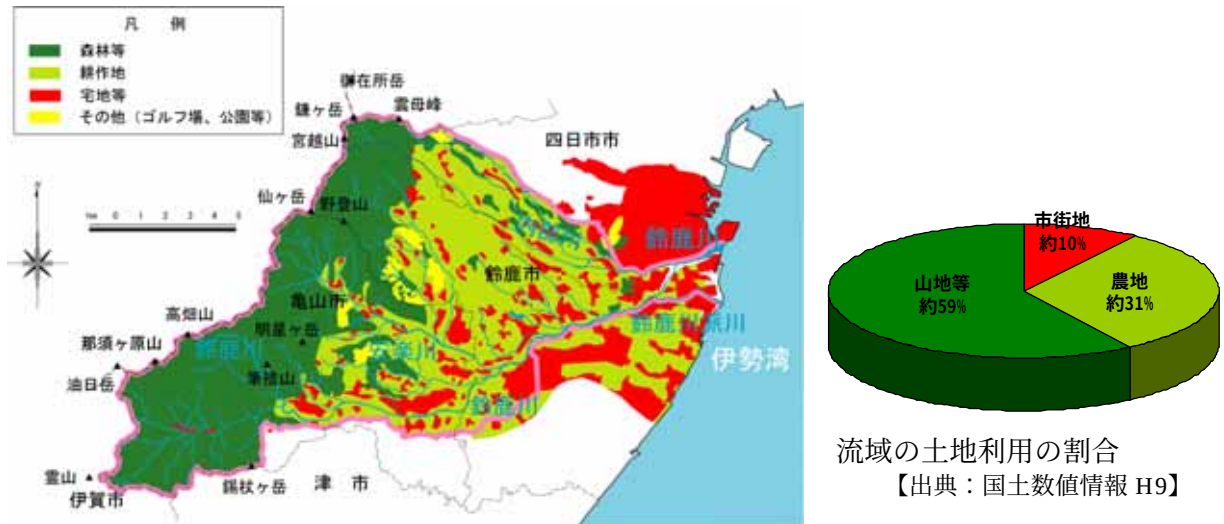


図 3-2 鈴鹿川流域の土地利用状況

表 3-2 鈴鹿川沿川市の土地利用状況（民有地）

単位：km²

	農地（田・畑）	住宅地	山林・池沼・原野	その他	合計
四日市市	130.84	51.36	19.32	10.55	212.07
鈴鹿市	127.97	31.60	15.91	11.73	187.21
亀山市	90.52	10.77	47.68	7.34	156.31
計	349.33	93.73	82.91	29.62	555.59

出典：三重県統計書（H17 年度）

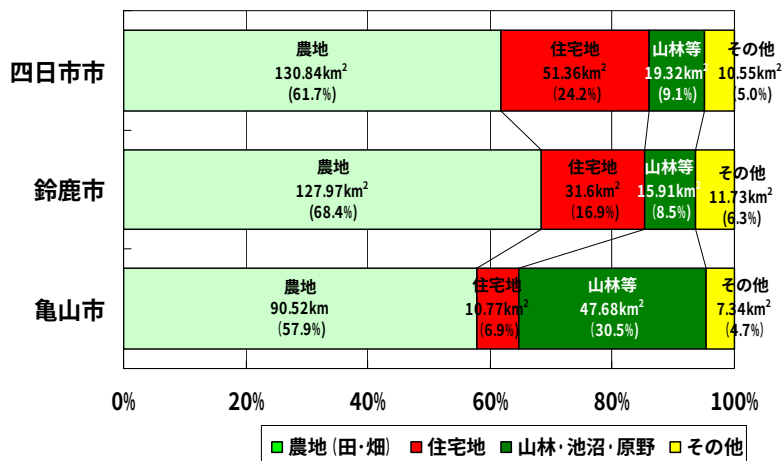


図 3-2 鈴鹿川沿川市の土地利用の割合（民有地）

【出典：三重県統計書】

3-3 産業・経済

沿川市町の産業分類別の就業者数を見ると、総数 276 千人に対して、第 1 次産業 3%、第 2 次産業 36%、第 3 次産業 61%となっている（平成 17 年）。

経年的には、昭和 35 年以降、第 1 次産業人口は減少を続け、第 3 次産業人口が増加している。第 2 次産業人口は平成 2 年までは増加していたが、それ以降は減少傾向にある。

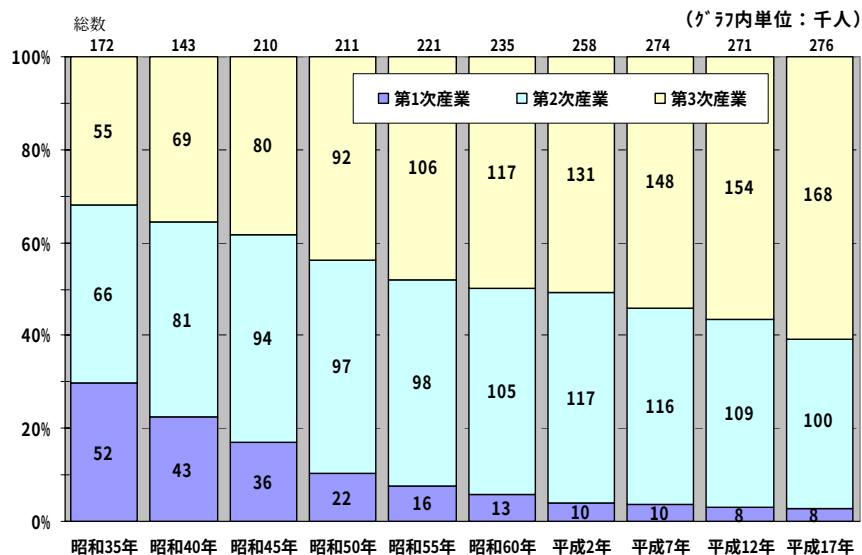


図 3-3 鈴鹿川沿川市町 産業別人口構成比（常住地）の変遷

（四日市市、鈴鹿市、亀山市、旧楠町、旧関町の合計） 【出典：三重県統計書】

注）第一次産業…農業、林業、水産業

第二次産業…鉱業、建設業、製造業

第三次産業…電気・ガス・熱供給・水道業、卸売・小売業、金融・保険業、不動産業、運輸・通信業、サービス業、公務（他に分類されないもの）

沿川市町における製造品出荷額は、昭和 40 年代の高度成長期以降急速に増加し、平成 2 年には約 3 兆 8 千億円に達している。その後、内陸部への工場進出に伴い平成 17 年には約 4 兆 5 千億円に達している。

また、農業産出額は、昭和 40～50 年代に増加し、昭和 55 年に約 37 億円まで達しているが、以降横這い傾向となっている、また平成 12 年以降は減少傾向となっている。

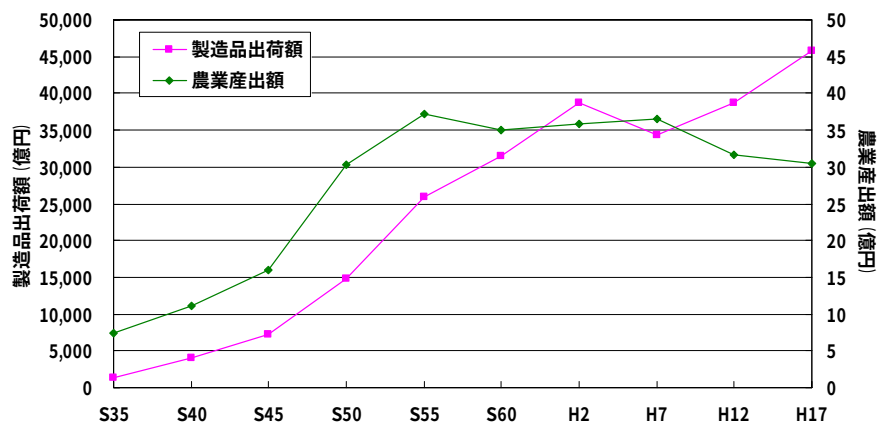


図 3-4 沿川市町における製造品出荷額、農業産出額の推移

【出典：三重県統計書】

工業については、産業中分類別の製造品出荷額の内訳は、輸送機械が 37.3%、化学が 18.2%、石油・石炭が 8.6%、電子部品が 8.0%、一般機械が 6.8%、その他が 21.1% となっている。このうち、上位 3 位を占める項目である輸送機械、化学、石油・石炭について、三重県全県に対し沿川市町の占める割合を見ると、輸送機械が 58.8%、化学が 82.4%、石油・石炭が 93.2%といずれも三重県内の出荷額の半数以上を占めており、県内でも中心的位置を占めていることが伺える。

自動車を中心とした輸送用機械は鈴鹿地区、石油コンビナートに代表される化学、石油・石炭については、四日市地区で盛んとなっている。

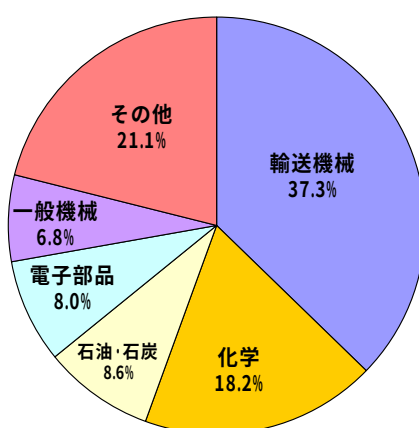


図 3－5 鈴鹿川流域における中分類別製造品出荷額（平成 16 年）

【出典：三重県統計書】

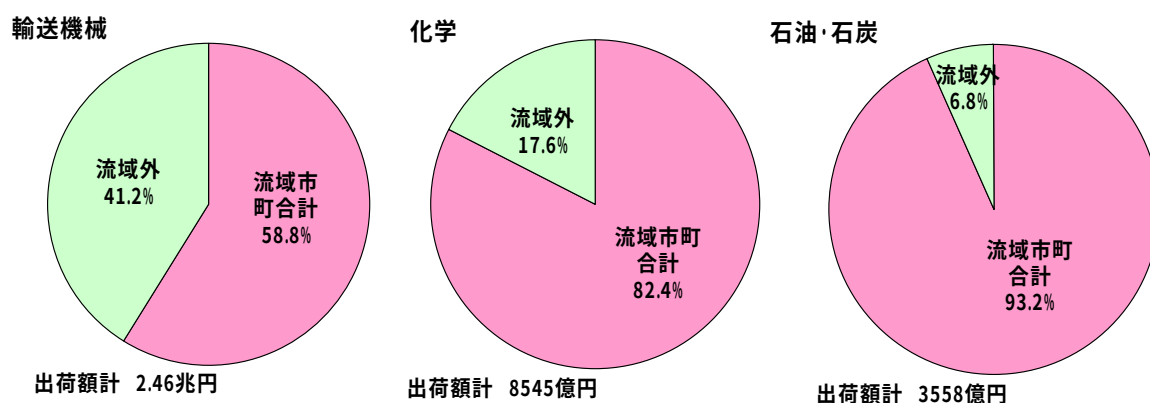


図 3－6 鈴鹿川流域において代表される製造品出荷額（平成 16 年）

【出典：三重県統計書】

中上流域に位置する鈴鹿・亀山地区には、三重県のクリスタルバレー構想の拠点である亀山・関テクノヒルズが位置しており、液晶関連企業の集積地となっていることから電子部品・デバイス関連産業などを中心に発展を見せている。

下流域に位置する四日市地区は、四日市市を中心とした石油コンビナート群が形成され、県内最大の産業集積地であるとともに、最大の都市圏であり、情報技術産業などの幅広い業種が立地し、産業を先導する地域となっている。



図3-7 鈴鹿川流域の工業地域と主な企業の位置図

【出典：中部経済産業局 HP 工業団地リスト等より作成】

農業については、中下流域の平野部は、古くから水田耕作が営まれる農業地域となっているとともに、中流域に分布する傾斜の緩やかな丘陵地では、お茶の栽培が盛んである。特産品となっている荒茶の生産量は、全県生産量の8割を占めている。

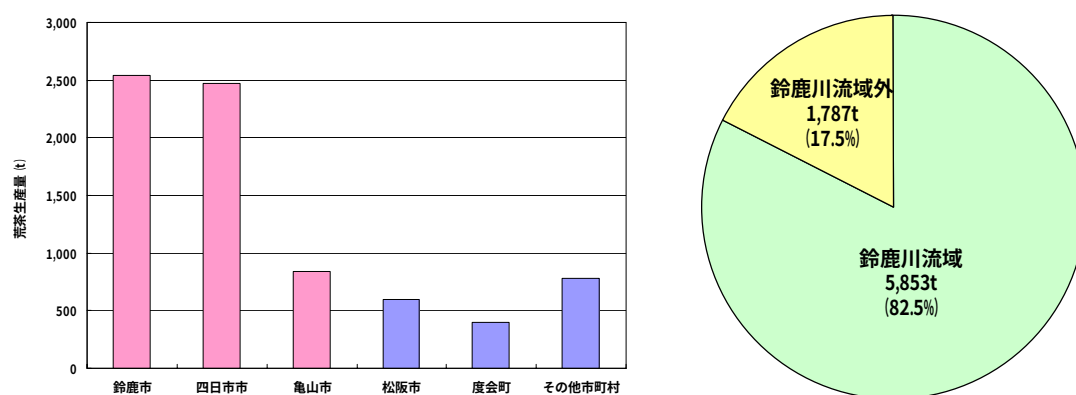


図3-8 鈴鹿川流域における荒茶の生産量（平成16年）

【出典：三重県統計書】

3-4 交通

古来より、鈴鹿川沿いには東海道と大和街道など、近江・大和方面への重要な交通路として利用されており、亀山市関町には古代の三関である「鈴鹿の関」がおかれていた。本川沿いに旧街道が通る特徴を反映して、石薬師・野村の一里塚、東西の追分けといった交通の要所としての史跡や、石薬師・庄野・亀山・関・坂下の旧宿場町を忍ばせる街並みが今も残っている。

旧東海道は、現在は国道1号となり、東西を結ぶ大動脈となるほか、下流の鈴鹿市には国道23号（伊勢街道）が南北に通っている。上流の亀山市では、本川と加太川に分岐によって国道1号と加太川に並行する国道25号（大和街道）が通っている。また、流域の中央には南北に東名阪自動車道が通過しており、鈴鹿IC、亀山ICおよび伊勢関ICが配置されている。

鉄道は、鈴鹿川と並行して JR 関西本線が通っており、名古屋～大阪方面とを結ぶ動脈となっている。また亀山駅において伊勢、和歌山方面へ向かう JR 紀勢本線と分岐している。下流には、名古屋と伊勢方面を結ぶ近鉄名古屋線が通っている。



図3-9 交通網図

第4章 水害と治水事業の沿革

4-1 主な洪水の概要

流域内の平均年間降水量は上流部山間地で 2,200～2,700mm、平野部では約 1,800～1,900mm であり、洪水要因としては台風性、豪雨性の両方となっている。

鈴鹿川における主要洪水、洪水及び被害の状況を以下に示す。

表 4-1 過去の主な洪水と洪水被害

洪水発生年	流域平均日雨量 (高岡地点)	流量 (高岡地点)	浸水状況・被害状況			
昭和 13 年 8 月 (低気圧・前線)	361mm(亀山)	2,300m ³ /s	床上浸水(戸)	不明	全壊流出(戸)	6
			床下浸水(戸)	不明	浸水面積(ha)	不明
昭和 28 年 9 月 (台風 13 号)	262 mm	1,500m ³ /s	床上浸水(戸)	7,064	死者	2 名
			床下浸水(戸)	不明	全壊流出(戸)	11
昭和 34 年 8 月 (台風 7 号)	277 mm	1,800m ³ /s	床上浸水(戸)	427	浸水面積(ha)	不明
			床下浸水(戸)	1,569	死者行方不明者	35 名
昭和 34 年 9 月 (伊勢湾台風)	225 mm	950m ³ /s	床上浸水(戸)	15,128	全壊流出(戸)	1,250
			床下浸水(戸)	3,119	浸水面積(ha)	不明
昭和 45 年 6 月 (台風 2 号・梅雨前線)	156 mm	500m ³ /s	床上浸水(戸)	0	死者行方不明者	115 名
			床下浸水(戸)	330	全壊流出(戸)	0
昭和 46 年 7 月 (台風 13 号・集中豪雨)	127 mm	490m ³ /s	床上浸水(戸)	0	浸水面積(ha)	400
			床下浸水(戸)	604	全壊流出(戸)	0
昭和 46 年 8 月 (台風 23 号・集中豪雨)	309 mm	2,100m ³ /s	床上浸水(戸)	161	浸水面積(ha)	10
			床下浸水(戸)	1,796	全壊流出(戸)	0
昭和 46 年 9 月 台風 29 号	185 mm	1,300m ³ /s	床上浸水(戸)	332	浸水面積(ha)	2,285
			床下浸水(戸)	1,416	全壊流出(戸)	0
昭和 47 年 7 月 (集中豪雨)	141 mm	900m ³ /s	床上浸水(戸)	0	浸水面積(ha)	151
			床下浸水(戸)	817	全壊流出(戸)	0
昭和 47 年 9 月 (台風 20 号・集中豪雨)	178 mm	1,100m ³ /s	床上浸水(戸)	29	浸水面積(ha)	94
			床下浸水(戸)	1,278	全壊流出(戸)	1
昭和 48 年 5 月 (集中豪雨)	143 mm	1,300m ³ /s	床上浸水(戸)	0	浸水面積(ha)	417
			床下浸水(戸)	382	全壊流出(戸)	0
昭和 49 年 7 月 (集中豪雨)	343 mm	3,200m ³ /s	床上浸水(戸)	1,147	浸水面積(ha)	7
			床下浸水(戸)	3,737	死者行方不明者	7,551
昭和 51 年 9 月 (台風 17 号・前線)	243 mm	850m ³ /s	床上浸水(戸)	12	死者行方不明者	2 名
			床下浸水(戸)	365	全壊流出(戸)	0
昭和 63 年 8 月 (台風 11 号)	265 mm	1,200m ³ /s	床上浸水(戸)	0	浸水面積(ha)	1,036
			床下浸水(戸)	19	全壊流出(戸)	0
平成 5 年 9 月 (台風 14 号・集中豪雨)	171 mm	1,800m ³ /s	床上浸水(戸)	4	浸水面積(ha)	32
			床下浸水(戸)	10	全壊流出(戸)	0
平成 7 年 5 月 (集中豪雨)	241 mm	2,000m ³ /s	床上浸水(戸)	2	浸水面積(ha)	48
			床下浸水(戸)	18	全壊流出(戸)	0
					浸水面積(ha)	2

※昭和 45 年以降は水害統計より集計、それ以前は「三重四川治水史」より集計

※S13 洪水の流量は痕跡水位などから推定。その他の流量は氾濫がなかった場合の流量

●昭和 34 年 9 月洪水（台風 15 号、伊勢湾台風）

台風の接近により日本の南岸にあった前線の活動が活発になり、23 日昼頃から雨が降り始めた。三重県南部では23 日夜中から24 日夜中にかけて強く降り続いた。台風は26 日18 時過ぎ、潮岬の西およそ15km の地点に上陸し、奈良・和歌山の県境、鈴鹿峠付近を通過、27 日0 時には富山の東を通過して衰えをみせず勢力を保持したまま日本海へ抜けた。

鈴鹿川河口では海岸堤防が250mにわたって決壊し、旧桶町や四日市市の海岸部では甚大な被害を被った。



海岸堤防の決壊（磯津海岸）

出典：鈴鹿川の災害【国土交通
省三重河川国道事務所】



床上浸水の状況（東亜社宅アパート）

出典：鈴鹿川の災害【国土交通
省三重河川国道事務所】



図 4－1 浸水区域図（昭和 34 年 9 月洪水）

●昭和 49 年 7 月洪水（低気圧）

発達した低気圧の接近により、7 月 24 日より雨が降り始め、低気圧の北上に伴って前面に強い雷雲が形成され、夜になって強い雨が降り出した。総雨量は三重県平野部で 300mm、山間部で 400mm を越す大雨となり、安楽川上流の野登では最大時間雨量 130mm に達した。

この豪雨の影響で、鈴鹿川、安楽川、内部川等至るところで決壊し、伊勢湾台風を上回る大出水となった。

流域内の被害は、死者・行方不明者 2 名、重軽傷者 6 名、家屋の全壊 7 戸、床上浸水 1,147 戸、床下浸水 3,737 戸、浸水面積 7,551ha に及んだ。



内部川 北小松橋流出状況



四日市市日永地内の状況

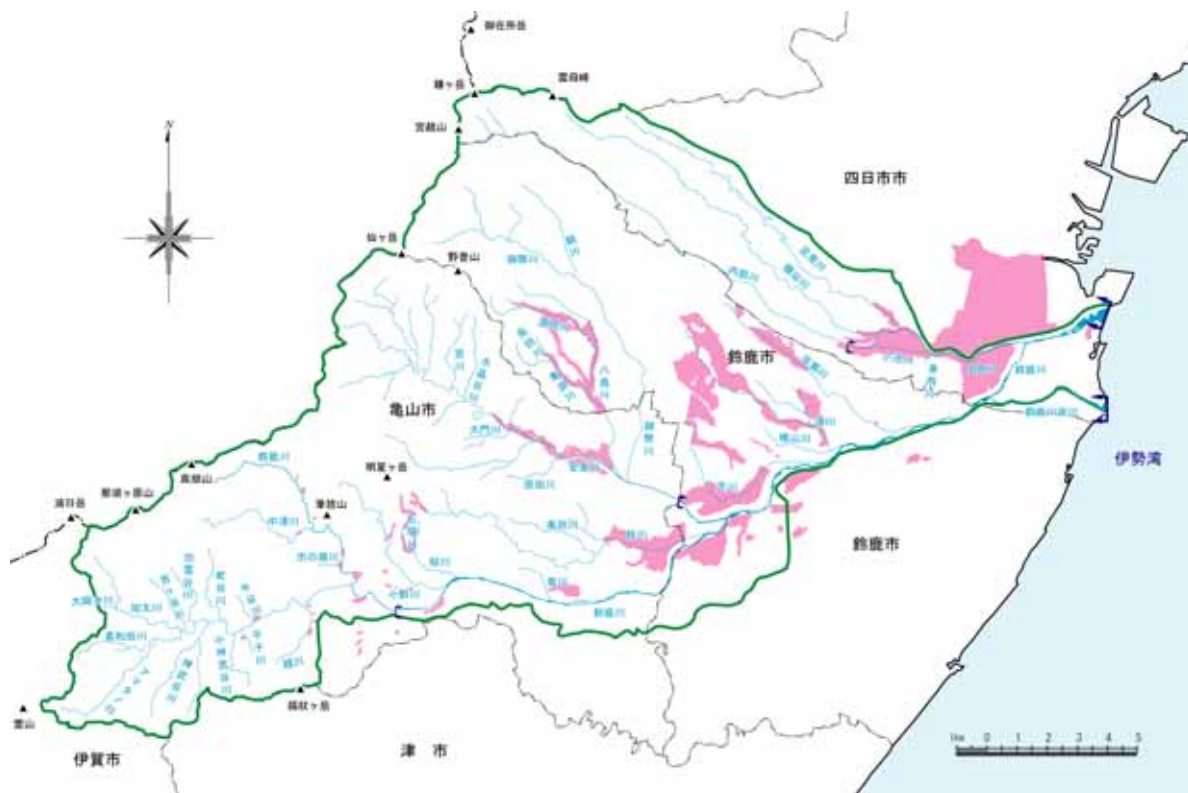


図 4－2 浸水区域図（昭和 49 年 7 月洪水）

●平成7年5月洪水（低気圧）

紀伊半島沖の低気圧の影響で南から温かい空気が流れ込み、5月11日午前から13日早朝にかけて激しい雨が降り続けた。総雨量は下流平野部で200mm程度、山間部で300mmを越え、亀山では時間雨量86mmを記録した。

豪雨の影響により鈴鹿川本川の亀山地点及び内部川の河原田地点では警戒水位を超え、床上浸水2戸、床下浸水18戸の被害を被った。

4-2 治水事業の沿革

鈴鹿川は多量の土砂流出により河道が安定せず、下流部では度々洪水による氾濫が発生した。この為、江戸時代より人々は上流部で崩壊地に石堤を設け（現在でいう砂防工事）、下流部では築堤を行ってきた。しかし、右岸側は神戸城下であることから左岸堤の強化は許されず、この地域では命がけで左岸堤を嵩上げた女人堤防なる話が伝えられている。

国による本格的な治水工事は明治末期に上流砂防事業に着手したことから始まった。

昭和 13 年 8 月に、記録的豪雨により味曽有の災害をうけたことから、土石流による河道上昇及び下流四日市周辺の軍需工場に対する洪水防御のため、昭和 17 年に直轄改修河川として高岡地点の基本高水のピーク流量を $2,300 \text{ m}^3/\text{s}$ とし、河道で全て対応する計画として直轄治水事業が始められた。さらに昭和 19 年には崩壊の著しい内部川、鍋川の砂防事業も直轄工事に編入された。（砂防事業は昭和 44 年度の規制を期に三重県に引き継がれている。）

治水事業はその後昭和 17 年の改修規模を踏襲した昭和 28 年以降総体計画、昭和 38 年以降総体計画に受け継がれ、引き堤、築堤、河道掘削、高水敷造成などが行われた。

昭和 42 年には一級河川に指定され、従前の計画を踏襲する工事実施基本計画が策定された。

以上の治水事業により洪水脅威も半減するに至ったが、流域の発展に伴う更なる安全確保の必要性をうけて、昭和 46 年に工事実施基本計画を改訂し、高岡地点における基本高水のピーク流量を $3,900 \text{ m}^3/\text{s}$ とし、河道で全て対応する計画とするため、鈴鹿川派川へ洪水流を分派させる計画とした。

鈴鹿川、鈴鹿川派川の河口部については、昭和 28 年 9 月の台風による被害を受けて、高潮対策事業が昭和 28～33 年にかけて実施されたが、昭和 34 年 9 月の伊勢湾台風による被害を受けたため、伊勢湾高潮対策事業として昭和 35～38 年にかけて再度、事業を実施した。

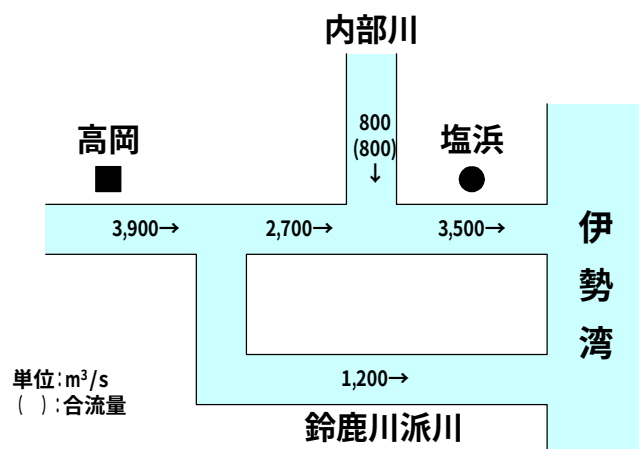


図 4-3 工事実施基本計画における流量配分図

表 4－2 治水事業の沿革一覧

西暦	年月日	記 事	主要洪水
1902	明治 35 年	砂防指定地として指定	
1916	大正 5 年	鍋川上流の砂防ダム工事に着手（三重県主体）	
1920	大正 9 年	入道ヶ岳の山腹工事着手	
1942	昭和 17 年	鈴鹿川直轄河川指定 基準地点高岡の計画高水流量 2,300m ³ /s 直轄区間 鈴鹿川本川 0.0k～12.0k 内部川 0.0k～4.0k 本川下流右岸小倉地区の築堤及び引堤に着手(昭和 34 年完成)	
1944	昭和 19 年	鈴鹿川直轄砂防指定	
1946	昭和 21 年	内部川砂防事業着手	
1948	昭和 23 年	鍋川砂防事業着手	
1949	昭和 24 年	直轄河川総体計画策定	
1950	昭和 25 年	鈴鹿砂防事業、砂防ダム工事着手 本川右岸派川分派点から木田橋間の築堤及び引堤に着手 (昭和 35 年完成)	
1953	昭和 28 年	昭和 28 年度以降、直轄河川改修総体計画	
1954	昭和 29 年	鈴鹿川水系砂防工事着工、御幣川砂防事業着手 本川下流左岸大里地区、内部川下流左岸川尻地区左岸引堤着 手（昭和 55 年度完成）	
1956	昭和 31 年	内部川流路工工事着手	
1959	昭和 34 年	本川下流貝塚地区の築堤及び引堤に着手（昭和 45 年完成）	S34.9 月洪水 (伊勢湾台風)
1962	昭和 37 年	本川下流本郷地区の築堤及び引堤に着手（昭和 43 年完成）	
1963	昭和 38 年	昭和 38 年度以降 直轄河川改修総体計画、伊勢湾高潮対策事 業完成	
1965	昭和 40 年	波瀬川合流点処理完成	
1966	昭和 41 年	蒲川改修事業着手（昭和 46 年完成）	
1967	昭和 42 年	鈴鹿川水系が一級河川に指定 工事実施基本計画策定 計画高水流量 2,300m ³ /s 直轄区間編入 鈴鹿川本川 12.0k～15.8k 鈴鹿川派川 0.0k～4.0k 安楽川 0.0k～1.2k	
1970	昭和 45 年	鈴鹿川砂防工事完成	
1971	昭和 46 年	工事実施基本計画改定 基準地点高岡における計画高水流量を 3,900m ³ /s とし、派川 へ 1,200m ³ /s 分派させ、河口 3,500m ³ /s とした。 支川は、内部川 800m ³ /s、安楽川 2,600m ³ /s としている。	S46. 8 洪水
1972	昭和 47 年	直轄区間編入 内部川 4.0k～6.0k+60m 鈴鹿川派川の改修に着手 都市河川環境整備事業着手	S47.6、S47.9 洪水
1973	昭和 48 年	直轄区間編入 鈴鹿川本川 15.8k～27.8k	
1974	昭和 49 年	直轄区間編入 安楽川 1.2k～1.9k	S49. 7 洪水 (既往最大)
1975	昭和 50 年	派川左岸の分派点付近の引堤着手 内部川下流右岸の引堤着手（昭和 54 年完成）	
1976	昭和 51 年	安楽川築堤工事着手	
1979	昭和 54 年	河原田排水機場完成	

※赤字：砂防事業 青字：河道整備 黒字：河道計画

第5章 水利用の実態

5-1 水利用の変遷

鈴鹿川下流の平野部では弥生時代には人が定住し、鈴鹿川の流れも幾条にも分かれていたと想定されることから、鈴鹿川の水を利用した水田耕作が営まれていた。奈良時代に入ると、律令体制のもと、条里制水田が発達し、鈴鹿川の水を利用した水田耕作が盛んに行われるようになった。鈴鹿川下流域の条里の分布は、平野部のほとんど全域にわたっている。



図5-1 下流平野部の地籍図【出典：鈴鹿市史】

江戸時代に入ると、新田開発も行われ、多くのかんがい用水施設がつくられてきたが、昔から鈴鹿川は砂河川であるため川の水が伏流水化し、渇水時には表流水が絶え川堀りが必要となるなど、農業用水の確保には苦勞してきた。このため、鈴鹿川流域では昔より地下にトンネルを掘り、湧き出す地下水を導くマンボと呼ばれるこの地方特有の暗渠式の灌漑施設が工夫されてきた。

マンボの構造は一般的に横井戸に竪穴（日穴とか息出しと呼ばれている）を伴っており、一部は上部を開け放した水路（開渠）の所や伏せ越しの石積みとか伏蓋を除いて、地下水路はほとんど素掘りのままで伏流水や浅層地下水を集めて自然流下させ、地表に導き出すようになっている。地下水路の長さは長いもので3～4km、短いものは50m程度で1,000m前後のものが多い。地下水路の上流部は地下水面下にあるのでここで地下水が湧出・浸出してくることになる。用水供給量は長いものほど多くなり、7haの水田に供給していたものも見られた。

マンボの掘削年代は記録に残っている中で一番古いものは、1636年(寛永13年)につくられたいなべ市平野新田の六反マンボである。江戸時代の天明の大飢饉はマンボの掘削に大きな刺激を与え、江戸時代の後半から明治時代にかけて各地で盛んにつくられている。大正から昭和にかけても散発的につくられていたが、今はつくられていない。

このように水利用の工夫がされてきたが、夏季の干ばつ時には水の取水をめぐり用水間で度々紛争が起きていたほどで、この用水で灌漑されない内陸部や海岸地帯においては絶えず用水難に悩まされていた。

最も用水難に悩んだ白子^{しらこ}、江島^{えじま}、野町^{のまち}の3ヶ村では、白江野用水を明治14年に起工し、資金苦や水量不足の困難に苦闘したが明治20年(1879年)に全線貫通させ、その後明

治 28 年に^{たまがき}玉垣村を区域に加え鈴鹿川の用水に歴史と功績を残し現在に至っている。

このように、用水改善は緊急の課題であったため、昭和 27 年より鈴鹿川沿岸用水改良事業が着工され、15 箇所存在した取水樋門を 2 箇所の頭首工に統合し、鈴鹿川右岸下流の平野部及び旧楠町の合わせて 2,380ha の農地にかんがい用水を供給できるようになった。その後、三重用水事業の進捗により、平成元年度より暫定通水が開始、平成 4 年度の三重用水の完成に伴い本運用が実施され、三重用水からの補給も行われるようになり、安定的な水源の確保が図られるようになった。

水道用水や工業用水については、地下水に依存するほか、昭和 30 年代以降、木曽川水系を主とする流域外からの供給（北伊勢工業用水事業、北中勢水道用水供給事業）により、安定した水供給が保たれている。

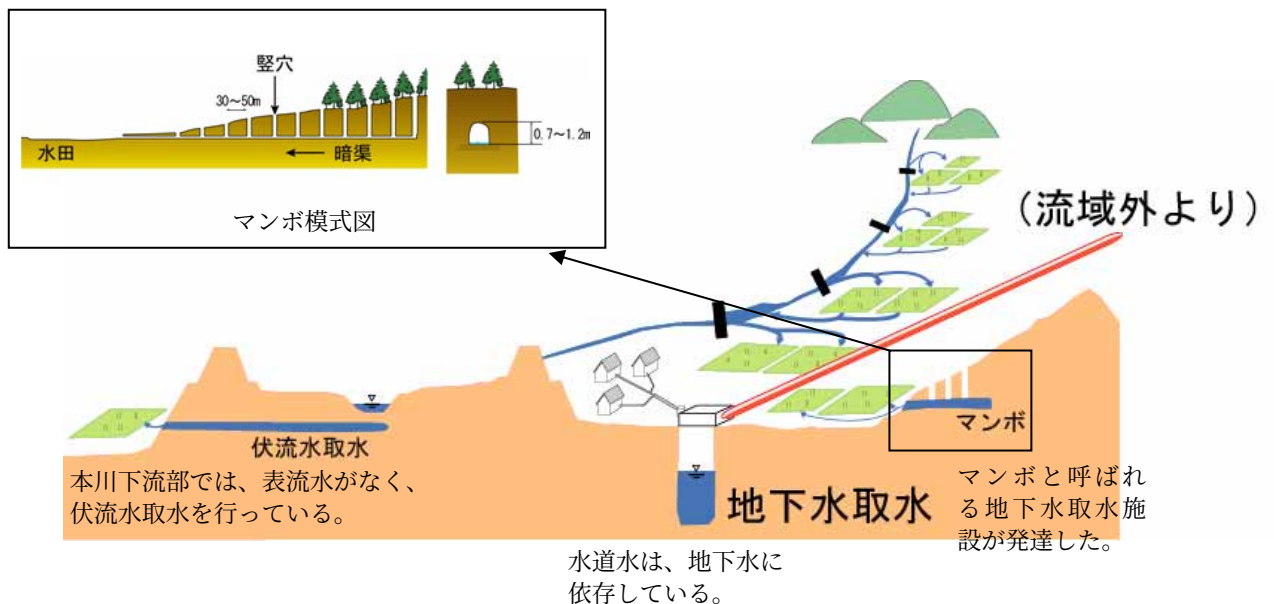


図5-2 鈴鹿川水系の水利用の特徴

5-2 水利用の現状

鈴鹿川水系における河川水の利用は、農業用水の比率が約9割を占め、鈴鹿川沿岸用水による取水が最も多い。

農業用水は、446件（許可57件、慣行389件）で、最大約20.843m³/sの取水が行われ、かんがい面積約5,620haの農地へ供給している。水道用水は、3件（許可2件、慣行1件）で約0.017m³/sの取水が行われており、鈴鹿市、亀山市に供給している。工業用水は、地下水や流域外の本曾川や長良川を水源とする北伊勢工業用水から供給しており、鈴鹿川水系からの取水は行われていない。

また、三重用水として、鈴鹿川からは内部川及び御幣川の上流部で3.2m³/sの取水が行われており、木曾川水系牧田川や員弁川等の流域外からの導水も含め、鈴鹿市、四日市市の農業用水、工業用水、水道用水の供給を行っている。

表5-1 鈴鹿川水系の水利用状況

種別	法	件数	最大取水量 (m ³ /s)	備考
発電用水	許	0	—	
水道用水	許	2	0.011	
	慣	1	0.006 ※1)	495m ³ /日
工業用水	許	0	—	
農業用水	許	57	11.004 ※2)	かんがい面積 約5,620ha
	慣	130	9.839 ※2)	
		259	—	
その他	許	3	3.225	うち、三重用水1件3.2m ³ /s 砕石洗浄用水1件、営業用雑用水1件
合計	許	62	14.240	
	慣	390	9.845	
	計	452	24.085	

【出典：水利権台帳（三重河川国道事務所）、慣行水利権届（三重県）】

許：河川法第23条の許可を得たもの

慣：河川法施行前から存在する慣行水利

※1)：日量を換算した

※2)：農業用水のうち、最大約3.398m³/sは伏流水取水が行われている。

(注)：慣行水利の最大取水量やかんがい面積は、届出に記載があるものを集計

・許可水利（指定区間）において、かんがい面積が不明なのが11件がある。

(現在、更新許可申請を行うこととして指導を行っている。)

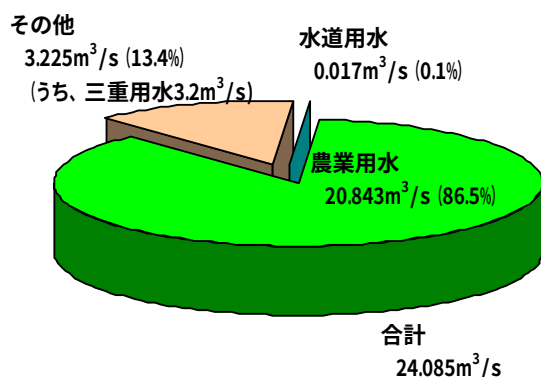


図5-3 鈴鹿川水系の水利用の割合



図5-4 鈴鹿川における主な取水

5－3 渇水被害と渇水調整等の状況

昔から鈴鹿川では用水の確保には苦労してきたが、鈴鹿川沿岸土地改良事業の完成や三重用水事業の完成により、慢性的な水不足は解消された。

三重用水の本運用が開始された平成5年度以降、平成17年の渇水時に初めて節水対策が実施された。

平成17年は初頭より3月末までの貯水量は平年並みであったが、農業用水の供給増とともに貯水量が減少し、6月29日には全体貯水量が40%まで低下したため、第1回三重用水節水対策協議会を開催し、7月1日9時より、農業用水、水道用水、工業用水各々10%の節水対策を実施した。その後、梅雨末期のまとまった降雨により7月20日に節水対策を解除したが、8月に入ってまとまった降雨がなく、8月18日には貯水量が過去最低である26%まで低下したため、8月19日9時より再度10%の節水対策を実施、平成18年2月に解除されるまで節水対策が実施された。

表5－3 三重用水渇水対策の経緯

年月日	三重用水4ダム 貯水量(千 m^3) ()内は貯水率	渇水対策の経緯
H17.6.29	8,560 (40.0%)	第1回三重用水節水対策協議会 7月1日9時から第1回節水対策(上水、工水、 農水各10%)実施
H17.7.6		第2回三重用水節水対策協議会
H17.7.20		第3回三重用水節水対策協議会 節水対策解除
H17.8.18	5,593 (26.0%)	第4回三重用水節水対策協議会 8月19日9時から第2回節水対策(上水、工水、 農水各10%)実施
H18.2.20	16,390 (76.6%)	第5回三重用水節水対策協議会
H18.2.21		2月22日9時より節水対策解除

5-4 水需要の動向

鈴鹿川流域を含む三重県北勢地域の水需要については、平成16年に全部変更された「木曾川水系における水資源開発基本計画（第4次計画）」において、平成27年を目標として、水道用水、工業用水合わせて11.7 m^3/s が想定され、供給施設として三重用水、長良川河口堰、木曾川用水等により安定供給が図られることとなっている。

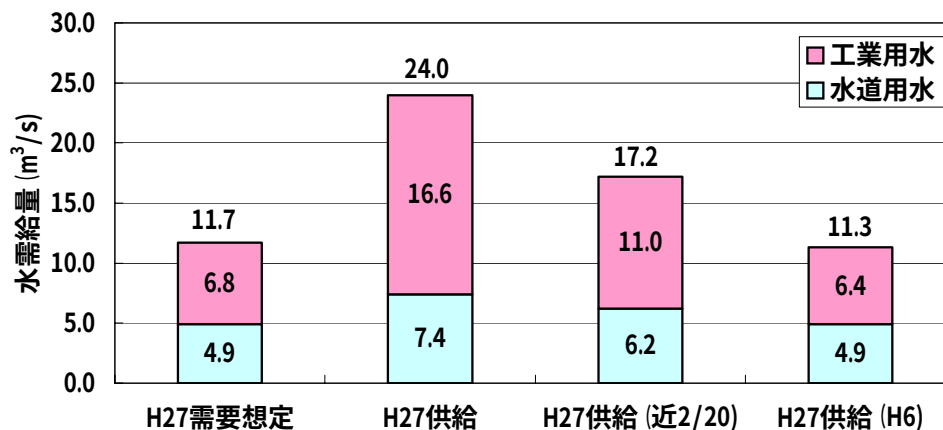


図5-5 木曾川水系水資源開発基本計画における水需給想定（三重県北勢地域）
（平成27年）

【出典：水資源開発分科会木曾川部会資料より作成】

（注）このグラフにおいて「H27供給（近2/20）」は、近年の20年に2回発生する規模の渇水を対象とした供給可能水量を示している。

（注）「H27供給（H6）」は、近年最大の渇水であるH6年を対象とした供給可能水量を示している。

※三重県北勢地域：四日市市、^{くわな}桑名市、鈴鹿市、亀山市、いなべ市、木曾岬町、^{あまひ}朝日町、^{かわこま}川越町、^{とういん}東員町、菟野町

1) 農業用水（かんがい用水）

鈴鹿川における農業用水の取水は、鈴鹿川沿岸用水の取水量が最も多い。

鈴鹿川流域では、三重県により実施された鈴鹿川沿岸用水と水資源機構の管理による三重用水により水源の確保が図られている。

鈴鹿川沿岸用水改良事業は、昭和27年度より県営事業として着工、鈴鹿川右岸下流の平野地帯の鈴鹿市と隣接する四日市市（旧楠町）の一部を合わせた区域に対するかんがい用水の改良が行われ、昭和41年度に完了した。

平成5年の水利権更新時には、営農形態の変化に伴う取水時期の前倒しが行われ、三重用水からも補給を受けることとなった。

三重用水事業は、三重県北勢地域の鈴鹿山麓から伊勢湾にわたる地域の慢性的な水不足を解消するため、農業用水の確保とこの地域の発展に伴い需要の増大が見込まれる都市用水の供給を目的として昭和39年度に着工された事業であり、平成4年度に完成し、平成5年度より、鈴鹿川沿岸用水の営農形態の変化に伴う増量分について補給を行うと共に、鈴鹿市、四日市市へ供給している。

表 5－4 鈴鹿川沿岸用水改良事業の概要

	平成 5 年度更新による概要
受益市町	鈴鹿市、四日市市（旧楠町）
かんがい面積	2,116.2ha
最大取水量	5.531m ³ /s

※鈴鹿川沿岸用水改良事業は、昭和 27～41 年に事業実施、平成 5 年に水利権更新が行われ現在に至っている。

2) 水道用水

鈴鹿川流域における水道用水利用としては地下水取水への依存度が高く、約 75%が地下水に依存するほか、北中勢水道用水供給事業により確保されている。

北勢水道用水供給事業は、四日市市をはじめとする北勢地域の水需要に対応するため、三重県により昭和 46 年に創設された事業であり、木曽川水系を水源として鈴鹿川、四日市市などへ供給している。

表 5－5 北中勢水道用水供給事業計画

北中勢水道用水供給事業（北勢系）	
事業認可年月日	創設）昭和 46 年 7 月 28 日（木曽川水系） 拡張）昭和 63 年 3 月 31 日（三重用水系） 2 拡）平成 10 年 7 月 30 日 （北中勢水道用水供給事業に名称変更及び第二次拡張）
計画目標年次	平成 22 年度
計画給水人口	773,000 人
計画施設能力	178,900 m ³ /日
現在施設能力	137,700 m ³ /日
取水地点及び水源	愛知県弥富市 木曽川水系木曽川〔木曽川用水〕 （岩屋ダム）
	三重郡菰野町 木曽川水系牧田川〔三重用水系〕
	桑名市長島町 木曽川水系長良川（長良川河口堰）
給水団体数	7（3 市 4 町）

【出典：三重県企業庁 HP】

3)工業用水

流域における工業用水の利用としては、地下水に依存するほか、臨海部では木曽川及び長良川を水源とする北伊勢工業用水道事業により確保されている。

また、三重用水を水源とし、鈴鹿市内陸部の工業開発計画に伴う水需要に応えるために鈴鹿工業用水事業が計画されており、今後の水需要については確保されている。

表 5－6 北伊勢工業用水道事業の概要

事業名	給水区域	水 源	給水能力 (m ³ /日)	契約給水量 (m ³ /日)	給水開始 年月日
北伊勢 工業用水道	桑名市 四日市市 鈴鹿市 津市 朝日町 川越町	員弁川 長良川 (長良川河口堰) 木曽川 (岩屋ダム)	(990,000) 830,000	705,490	S31.4.1

・給水能力、契約水量は平成 19 年 4 月 1 日現在の値

・給水能力の（ ）内は全体計画量を、給水開始年月日は一部給水開始の日をあらわす。

【出典：三重県企業庁 HP】

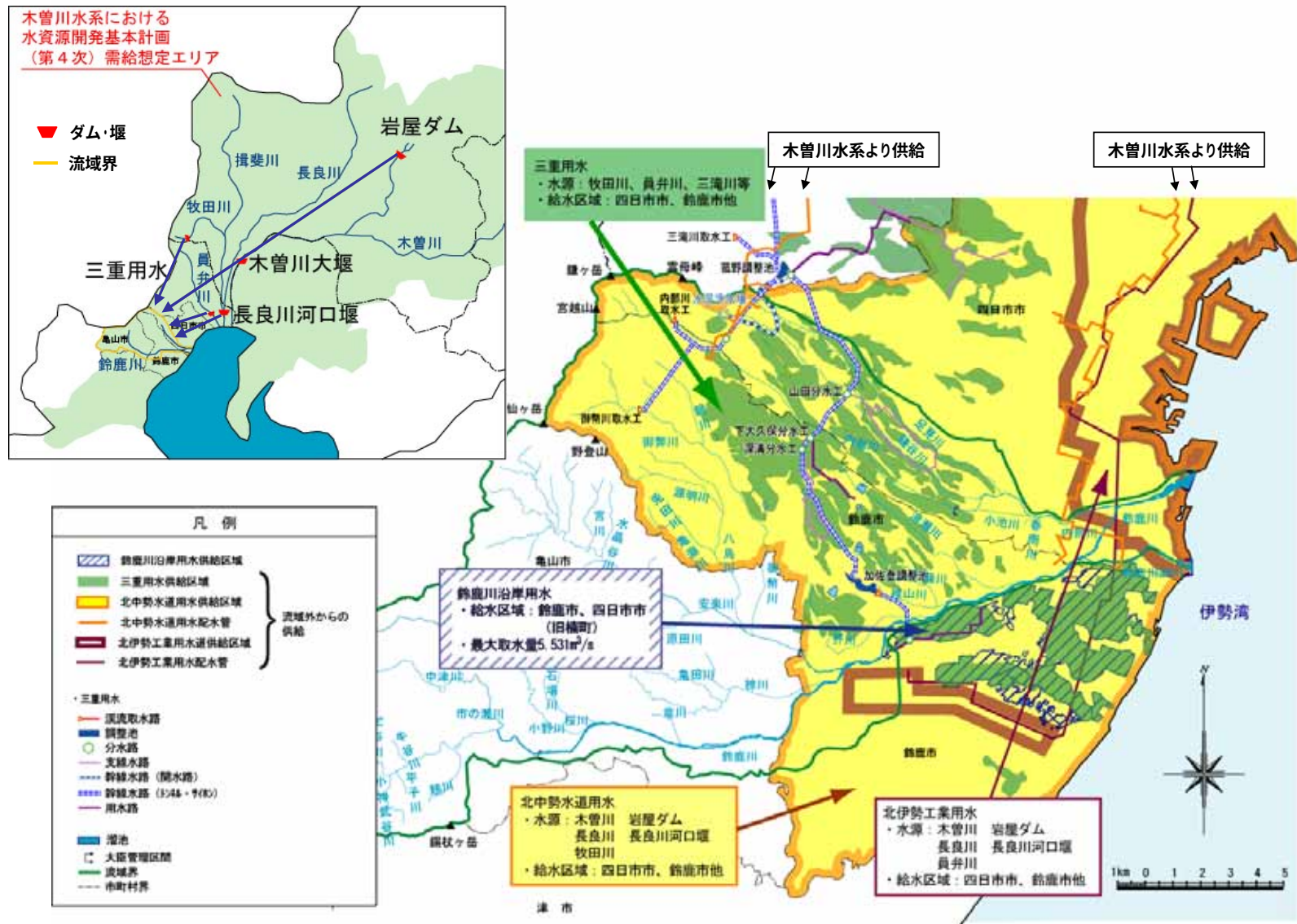


図5-6 鈴鹿川流域の水資源供給区域 【出典：三重用水パンフレット

水の恵み(三重県企業庁事業概要)などより作成】

第6章 河川流況と水質

6-1 河川流況

鈴鹿川高岡地点の昭和41年以降の流況は表6-1に示すとおりである。昭和41年～平成17年までの40年間のうち、欠測年を除く37年の平均で、低水流量は2.32m³/s、渇水流量は0.42m³/sであり、10年に1回程度の規模の渇水流量は0.03m³/sである。

表6-1 高岡地点流況表（上流流域面積268.6km²）

		流況(m ³ /s)					年総量 (×10 ⁶ m ³)
		豊水流量	平水流量	低水流量	渇水流量	年最小流量	年平均流量
昭和41年		15.87	8.09	3.70	0.14	0.00	15.35
昭和42年		9.52	5.66	3.04	0.41	0.00	12.50
昭和43年		14.87	6.83	3.16	0.95	0.16	14.31
昭和44年		8.03	4.34	2.97	0.00	0.00	9.22
昭和45年		13.94	7.63	4.40	0.24	0.02	15.69
昭和46年		9.85	6.08	3.37	0.49	0.18	13.21
昭和47年		12.25	5.38	3.20	1.25	0.09	18.09
昭和48年		6.71	3.58	1.52	0.08	0.00	8.55
昭和49年		欠測	欠測	欠測	欠測	欠測	欠測
昭和50年		欠測	欠測	欠測	欠測	欠測	欠測
昭和51年		8.83	4.51	2.28	0.52	0.00	11.44
昭和52年		8.64	3.49	1.04	0.15	0.10	9.52
昭和53年		3.17	1.67	0.68	0.08	0.00	3.46
昭和54年		8.14	4.02	2.03	0.12	0.00	10.24
昭和55年		12.14	6.05	3.25	1.79	0.10	10.82
昭和56年		9.30	4.18	2.07	0.06	0.00	8.86
昭和57年		10.41	3.89	2.24	0.28	0.13	15.34
昭和58年		10.59	3.35	1.68	0.28	0.13	9.17
昭和59年		5.96	2.27	1.09	0.03	0.00	9.06
昭和60年		9.19	3.36	1.51	0.27	0.12	10.54
昭和61年		6.09	2.00	1.10	0.33	0.08	9.18
昭和62年		5.50	2.36	1.28	0.31	0.15	5.07
昭和63年		11.78	4.33	1.14	0.31	0.25	17.15
平成元年		14.71	6.32	2.38	0.62	0.24	14.14
平成2年		欠測	欠測	欠測	欠測	欠測	欠測
平成3年		15.04	8.26	4.24	0.30	0.00	14.14
平成4年		10.46	5.01	2.89	0.44	0.06	9.67
平成5年		14.96	6.74	3.78	0.03	0.00	17.56
平成6年		4.54	2.21	0.88	0.14	0.06	6.65
平成7年		7.70	2.44	1.20	0.60	0.29	10.64
平成8年		6.55	4.25	1.09	0.07	0.00	6.26
平成9年		10.02	4.96	2.59	0.36	0.05	12.71
平成10年		16.40	8.98	5.18	1.45	0.72	15.56
平成11年		6.89	3.44	1.37	0.31	欠測	欠測
平成12年		6.59	3.00	1.71	0.38	0.14	7.21
平成13年		8.20	4.54	2.21	0.03	0.00	9.46
平成14年		4.15	2.42	1.46	0.70	0.42	5.12
平成15年		10.88	7.05	4.54	1.59	0.06	12.01
平成16年		12.53	5.12	2.70	0.02	欠測	欠測
平成17年		3.71	2.37	0.95	0.53	0.30	3.90
全期間 (S41～ H17)	最大	16.40	8.98	5.18	1.79	0.72	18.09
	最低	3.17	1.67	0.68	0.00	0.00	3.46
	平均	9.57	4.60	2.32	0.42	0.11	10.91
37ヶ年第4位		4.54	2.27	1.04	0.03	0.00	5.12
30ヶ年第3位		4.15	2.21	0.95	0.03	0.00	5.07
20ヶ年第2位		4.15	2.21	0.95	0.03	0.00	5.07

※欠測：「欠測」を含む年は平均から除外した

出典：昭和41年～平成15年 流量年表【国土交通省河川局編（社）日本河川協会】

平成16年～平成17年 国土交通省三重河川国道事務所資料

6-2 河川水質

1)環境基準類型指定の状況

鈴鹿川水系における環境基準は、表 6-2 に示すとおり指定されており、鈴鹿川本川では鈴国橋地点より上流が AA 類型、鈴国橋から河口までが A 類型に、支川では安楽川が AA 類型、内部川が全域で A 類型に指定されている。また、環境基準点として、勸進橋、鈴国橋、高岡橋、小倉橋（鈴鹿川）、和泉橋（安楽川）、河原田橋（内部川）が設定されている。

表 6-2 鈴鹿川における環境基準類型指定状況

水域名	類型	達成期間	基準地点	指定年月日 (見直し年月日)	指定期間
鈴鹿川上流(1) (勸進橋より上流)	AA	イ. 直ちに達成	勸進橋	S.45. 9. 1 (H. 7. 3. 28)	三重県
鈴鹿川上流(2) (勸進橋～鈴国橋)	AA	イ. 直ちに達成	鈴国橋	S.45. 9. 1 (H. 7. 3. 28)	三重県
鈴鹿川中流 (鈴国橋～鈴鹿川分派点)	A	イ. 直ちに達成	高岡橋	S.45. 9. 1 (H. 7. 3. 28)	三重県
鈴鹿川下流 (鈴鹿川分派点より下流)	A	イ. 直ちに達成	小倉橋	S.45. 9. 1 (H. 7. 3. 28)	三重県
内部川(全域)	A	イ. 直ちに達成	河原田橋	S.45. 9. 1 (H. 8. 3. 29)	三重県
安楽川 (全域)	AA	イ. 直ちに達成	和泉橋	H.10. 3.31	三重県

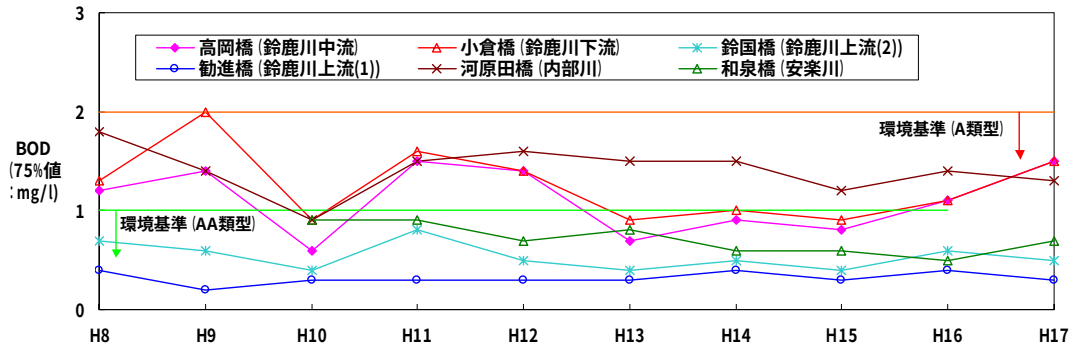


図 6-1 水質環境基準の類型指定

2) 水質の現状

鈴鹿川の水質は、最近 10 ヶ年（平成 8～17 年）では、本支川とも BOD75%値は環境基準値を満足しており、良好な水質を維持している。

一方、大腸菌群数は各地点とも環境基準を上回っている。



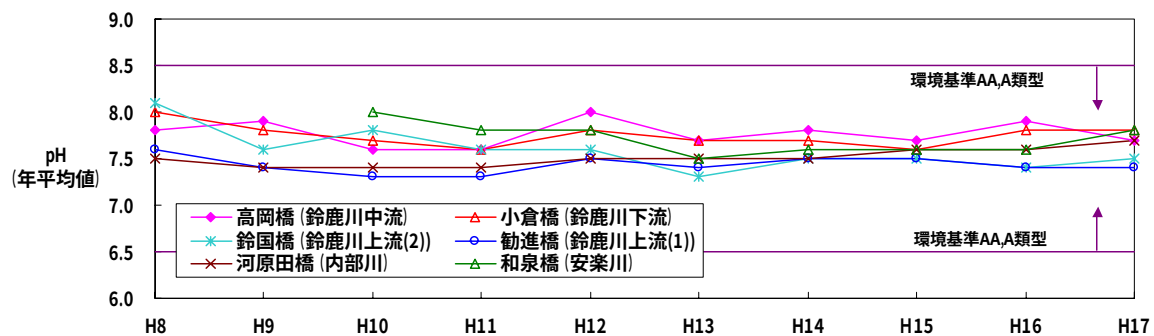
注) ※BOD

BOD(Biochemical Oxygen Demand: 生物化学的酸素要求量)とは、水中の有機物等を微生物が分解するときに消費する酸素量のこと、河川等の汚濁の程度を表す指標として用いられ、その値が大きいほど水質汚濁が進行していることになる。

※75%水質値

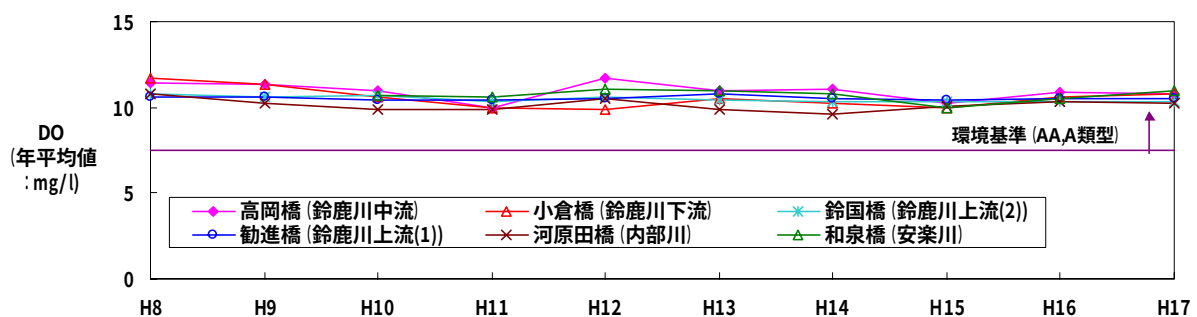
年間の日間平均値の全データをその値の小さいものから順に並べ、 $0.75 \times n$ 番目 (n は日間平均値のデータ数) のデータ値をもって 75%水質値とする。($0.75 \times n$ が整数でない場合は、小数点以下を切り上げた整数番目の値をとる。)

図 6-2 鈴鹿川水質経年変化 (BOD)



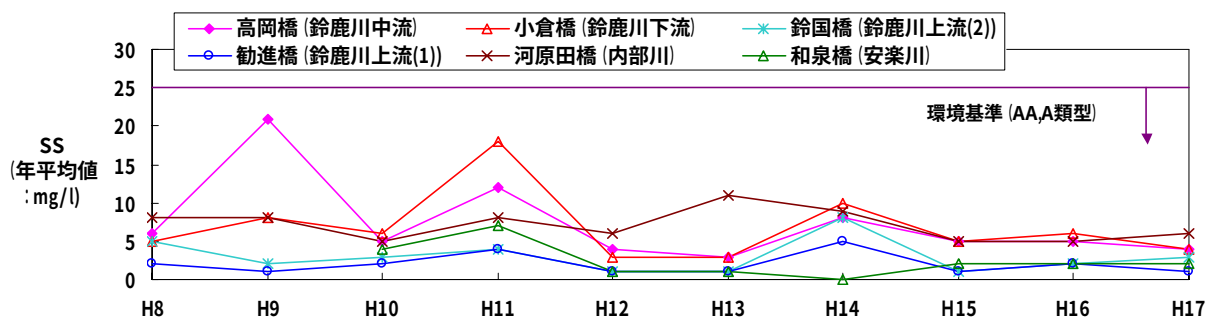
pH… pH とは水の酸性とアルカリ性の度合いを示す度合いであり、中性は pH7 で、7 より小さいものは酸性、大きいものはアルカリ性である。

図 6-3 鈴鹿川水質経年変化 (pH)



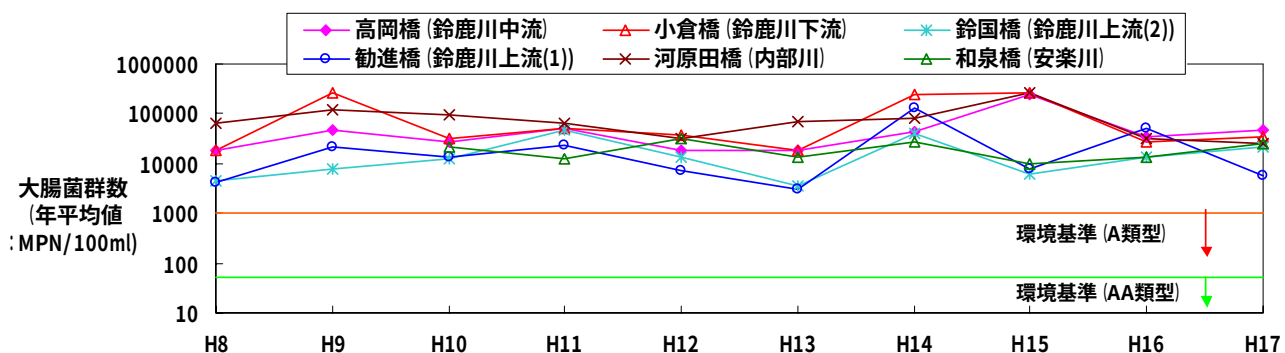
DO… DO とは水中に溶解している酸素のこと、河川や海域での自浄作用や、魚類をはじめとする水生生物の生活には不可欠なものである。

図 6-4 鈴鹿川水質経年変化 (DO)



SS…SS とは水中に浮遊している不溶解性の粒子状物質のことであり、SS が多いと水の濁りや外観が悪くなるなどの影響がある。

図 6 - 5 鈴鹿川水質経年変化(SS)



大腸菌群数…水のし尿等による汚染の程度を表す指標。大腸菌群数の単位MPNは、Most Probable Number (最確数) の略で、統計的確率から割り出して算出した値のことである。

図 6 - 6 鈴鹿川水質経年変化(大腸菌群数)

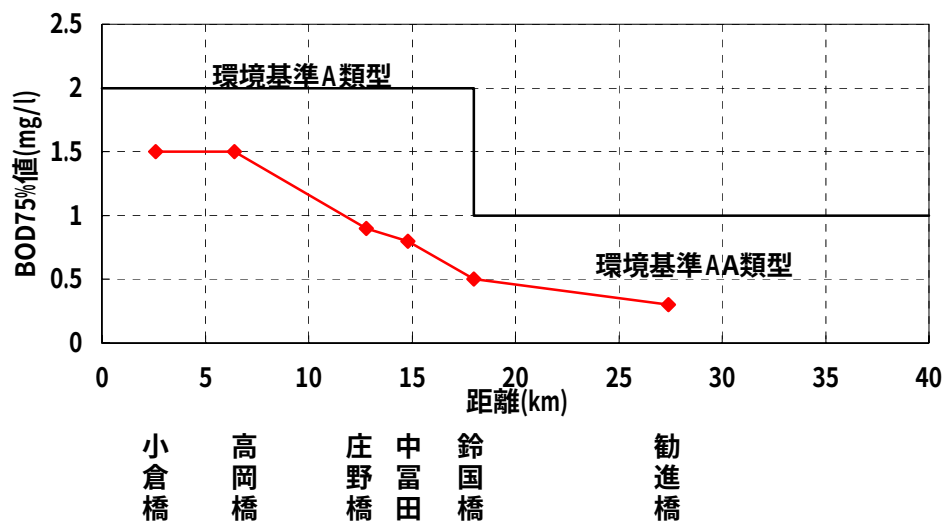


図 6 - 7 水質縦断変化図 (BOD75%値; 平成 17 年)

第7章 河川空間の利用状況

7-1 河川空間の利用状況

①高水敷利用状況

鈴鹿川における高水敷利用は、広い高水敷をもつ下流部に多く、運動場・公園として多くの市民に利用され、いこいの場所となっている。特に庄野橋周辺の鈴鹿川河川緑地や内部川との合流点付近の鈴鹿川緑地では、利用面積も広く野球場、サッカー場、運動広場、テニスコート等があり、休日などは多くの市民に利用されている。

中流部では、牧草地として利用されることが多くなっている。上流部には高水敷がほとんどないため、利用はほとんど見られない。

鈴鹿川直轄区間におけるレクリエーション利用施設等の占用数は 16 件、その他（牧草地等）として 9 件である。

表 7-1 鈴鹿川の河川空間利用

河川名	No	距離標 (km)	左右岸	施設名	種類	施設面積 (m ²)	管理者名	一般利用
鈴鹿川	1	3.6	左岸	鈴鹿川緑地	運動場	92,860	四日市市	可
	2	4.4~4.6	右岸	運動広場	運動場	42,030	四日市市	可
	3	5.2~5.8	左岸	運動多目的広場	運動場	24,818	四日市市	可
	4	5.8	左岸	運動(スポーツ)広場	運動場	11,458	鈴鹿市	可
	5	6.6	右岸	鈴鹿市都市計画高岡公園	運動場	358	鈴鹿市	可
	6	11.2~11.8	右岸	鈴鹿川河川緑地	運動場	158,249	鈴鹿市	可
	7	13.2	左岸	運動(スポーツ)広場	運動場	1,999	鈴鹿市	可
	8	13.3	左岸	運動(スポーツ)広場	運動場	20,950	鈴鹿市	可
	9	14.8	右岸	運動(スポーツ)広場	運動場	13,841	鈴鹿市	可
	10	15.6	左岸	運動広場	運動場	1,431	鈴鹿市	可
	11	27.4	左岸	町民運動場	運動場	6,692	亀山市	可
安楽川	12	0.6	左岸	運動広場	運動場	3,750	鈴鹿市	可
鈴鹿川派川	13	1.6	右岸	運動広場	運動場	6,305	四日市市	可
鈴鹿川	1	2.4	左岸	児童遊園地	公園	365	四日市市	可
	2	20.0~22.4	右岸	「川の一里塚」公園	公園	2,431	亀山市	可
鈴鹿川	1	6.8~11.4	右岸	鈴鹿川サイクリングロード*	サイクリングロード*	2,000	鈴鹿市	可
鈴鹿川	1	14.4~15.8	右岸	牧草地	その他	4,422	鈴鹿市酪農業協同組合	不可
	2	14.4~15.8	左岸	牧草地	その他	24,760	鈴鹿市酪農業協同組合	不可
	3	14.4~15.8	左岸	牧草地	その他	4,774	鈴鹿市酪農業協同組合	不可
	4	14.4~15.8	左岸	牧草地	その他	7,749	鈴鹿市酪農業協同組合	不可
	5	14.4~15.8	左岸	牧草地	その他	3,962	鈴鹿市酪農業協同組合	不可
	6	26.0~26.4	左岸	牧草栽培地	その他	5,090	関町酪農組合	不可
	7	26.2~27.0	左岸	牧草栽培地	その他	38,653	関町農業協同組合	不可
	8	26.8~27.2	左岸	牧草栽培地	その他	2,038	関町酪農組合	不可
	9	27.4~27.6	右岸	牧草地	その他	28,710	関町畜産組合	不可

(出典：国土交通省水情報国土HP)

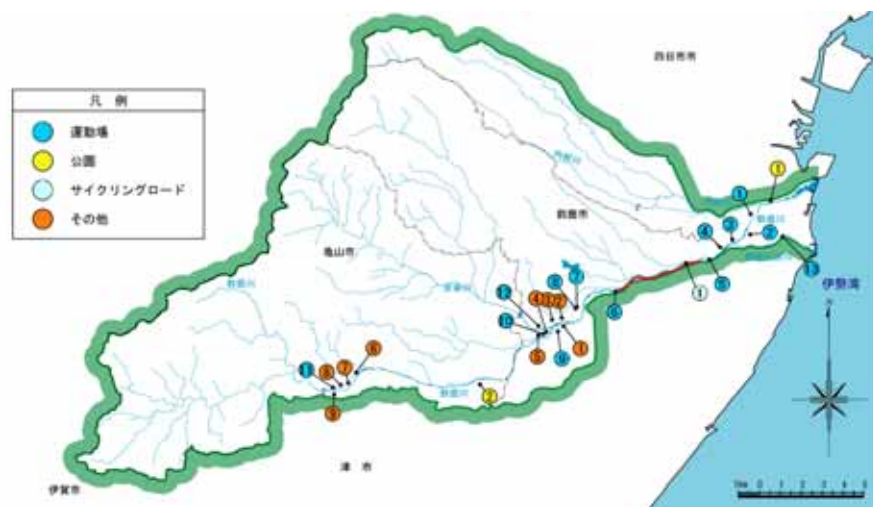


図 7-1 鈴鹿川の河川空間利用施設位置図

※図中の数字は表 7-1 に対応



庄野橋下流の鈴鹿川河川緑地

15.8 万 m^2 の広さがあり、最も広い面積を有している。野球場、運動広場、クリケットボールコート 3 面、ソフトボール場 2 面、テニスコート 4 面、多機能芝生広場などに利用されている。



鈴鹿川緑地

内部川との合流点に位置し、野球場、運動広場などに利用されている。

②年間利用状況

平成 15 年度に実施された「河川水辺の国勢調査（河川空間利用実態調査）」における直轄管理区間での鈴鹿川河川空間利用者数（推計）は、約 49 万人である。

利用形態では、スポーツが 68% と最も多く、次いで散策等が 28% で、両者あわせて 96% を占めている。

利用場所は、高水敷が 91% と最も多く、次いで堤防が 5% で両者で 96% を占める。水際は 3%、水面は 1% と低い利用状況となっている。

高水敷利用は、広い高水敷をもつ下流部に多く、運動場・公園として多くの市民に利用され、いこいの場所となっている。特に庄野橋周辺の鈴鹿川河川緑地や内部川との合流点付近の鈴鹿川緑地では、利用面積も広く、野球場、サッカー場、運動広場、テニスコート等があり、休日などは多くの市民に利用されている。

区分	項 目	年間推計値（千人）		利用状況の割合	
		平成12年度	平成15年度	平成12年度	平成15年度
利用形態	スポーツ	139	334		
	釣り	0	2		
	水遊び	19	22		
	散策等	93	136		
	合計	252	494		
利用場所	水面	0	3		
	水際	18	13		
	高水敷	232	452		
	堤防	2	26		
	合計	252	494		

図 7-2 鈴鹿川の河川空間利用状況

7-2 河川の利用状況

鈴鹿川上流部は、豊かな渓谷美を背景としたキャンプ場などがあり、自然を活用したキャンプや釣りなどの利用が行われている。特に、安楽川上流部の石水溪、内部川上流部の宮妻峡、御幣川上流部の小岐須溪谷では、初夏の新緑や秋の紅葉など渓谷美を楽しむ景勝地として、また、キャンプ場として多くの人々が利用している。

^{さるたひこたいしや}猿田彦大社の総本社といわれる^{つばきおおかみやしろ}椿大神社のほたりを流れる鍋川上流には椿溪谷があり、キャンプ場としても多くの人に利用されている。

また、東海自然歩道なども川沿いに整備されており、鈴鹿山脈への登山道や川沿いのハイキングなどにも利用されている。



名阪森林パーク

自然林の中に造られた森林公園で、マスの渓流釣りやつかみ取り、薬草園、炭焼かま、パターゴルフ場があり、子供からお年寄りまで楽しめる。



アユ釣り専用区（加太川）

鈴鹿川の JR 大和橋鉄橋から加太川一の湯堰までの区間は、アユ釣り専用区として確定され、シーズン期間中はアユの友釣りが行われている。

中流部は、旧東海道の関宿などが往時の姿を色濃く残しており、かつての暇道である大岡寺には桜並木が整備されるなど、歴史と調和した利用が行われている。

また、夏には鈴鹿川の河川敷で花火大会が行われ、多くの人でにぎわいを見せる。



大岡寺暇の桜並木

【出典：亀山市観光協会 HP】



関宿納涼花火大会

【出典：亀山市観光協会 HP】

鈴鹿川の河川敷において毎年 8 月に花火大会が行われ、バラエティ豊かな花火が打ち上げられる。

下流部は、高水敷が広くなり、公園や緑地等の施設利用が主体となっている。庄野橋下流には鈴鹿川河川緑地公園として、グラウンド、運動広場、テニスコートなどが整備され、ここから下流の高岡橋付近までサイクリングロードが整備されている。また、内部川合流点付近では、鈴鹿川緑地としてグラウンド等が整備されている。

このほかにも、各所に運動広場や公園等が整備され、地域住民の憩いの場として利用されている。

イベント利用としては、鈴鹿川バルーンフェスティバルが鈴鹿川河川緑地公園で毎年行われており、大勢の人々でにぎわいを見せる。



鈴鹿川バルーンフェスティバル



鈴鹿川サイクリングロード

8-1 河道特性

河口から内部川合流点付近までは砂泥質の河床であり、河床勾配は約 1/1,100 程度と緩く、感潮区間に位置し、セグメント 2-2 となっている。内部川合流点から井尻頭首工付近までは、緩やかに蛇行しながら流下している区間で、河床材料は砂礫質であり、河床勾配は約 1/600～800、セグメント 2-1 となっている。井尻頭首工から直轄区間上流端付近までは、緩やかに蛇行し、瀬淵を形成しながら流下しており、河床材料は砂礫質であるが礫成分が多くなり、河床勾配は約 1/200～400、セグメント 2-1 となっている。さらに上流では約 1/100 以上の急勾配となる。





鈴鹿川上流部（高畑山）
標高 773m の高畑山から急峻な溪谷を蛇行しながら流下している。



鈴鹿川中流部（21km 付近）
支川加太川を合流し、瀬淵や砂礫河原を形成しながら流下している。



鈴鹿川下流部（4km 付近）
鈴鹿川派川を分派し、緩やかに蛇行しながら流下している。



鈴鹿川河口部（0km 付近）
河口部には干潟が形成されている。左岸には砂州が発達している。



鈴鹿川派川河口部（0km 付近）
河口部には干潟が形成されている。左岸には砂州が発達している。

8-2 河床の経年変化

鈴鹿川は、源流域を構成する砂岩、花崗岩類の風化が著しく、土砂流出が多かったため、昭和 25 年頃までは河床がかなり高く、天井川であった。しかし、その後上流山地では直轄砂防事業が実施されるとともに、昭和 40 年代以降砂利採取も盛んに行われたことから、現在では昭和 20 年代と比較すると河床低下を起こしたが、近年は安定傾向である。

直轄砂防事業は、昭和 19 年に着手され、内部川や御弊川、鍋川などにおいて流路工、砂防ダム等の砂防施設が整備され、昭和 45 年に完成した。

また、鈴鹿川の砂利採取は、昭和 40 年代から行われており、昭和 50 年代中頃に最も盛んとなっている。昭和 42～平成 16 年の間の砂利採取量は、本支川合わせて 230 万 m^3 に達している。

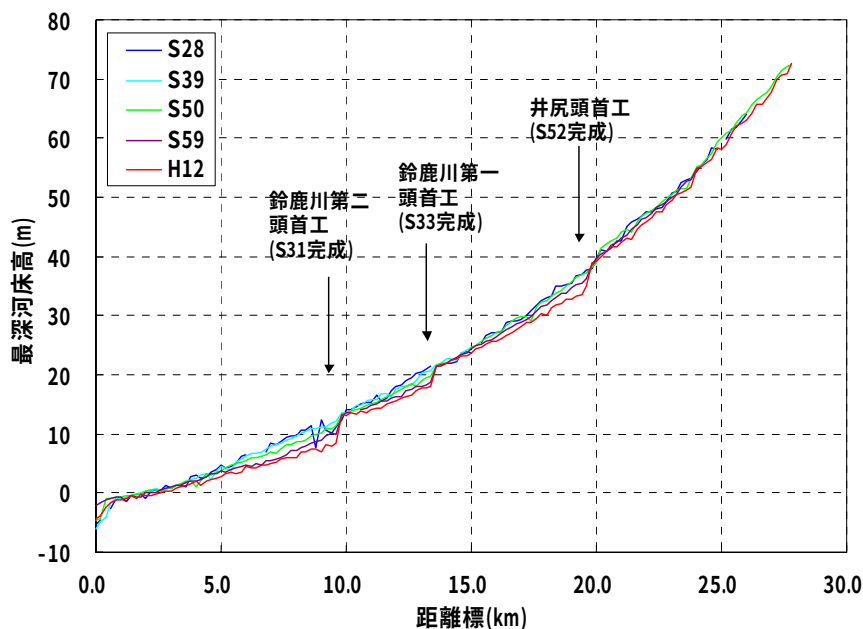


図 8-3 鈴鹿川の最深河床経年変化

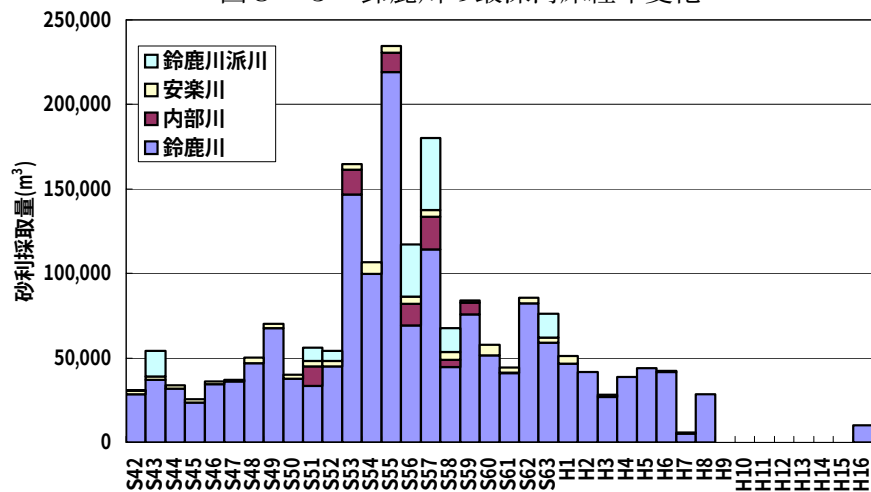


図 8-4 鈴鹿川の砂利採取量

河床変動量の変化を見ると、鈴鹿川では平成9年に砂利採取規制が行われるまでは、砂利採取の影響や砂防事業の効果による流出土砂量の減少のため、河床低下が発生している。平成9年以降は河床高の変動は安定した状態となっている。

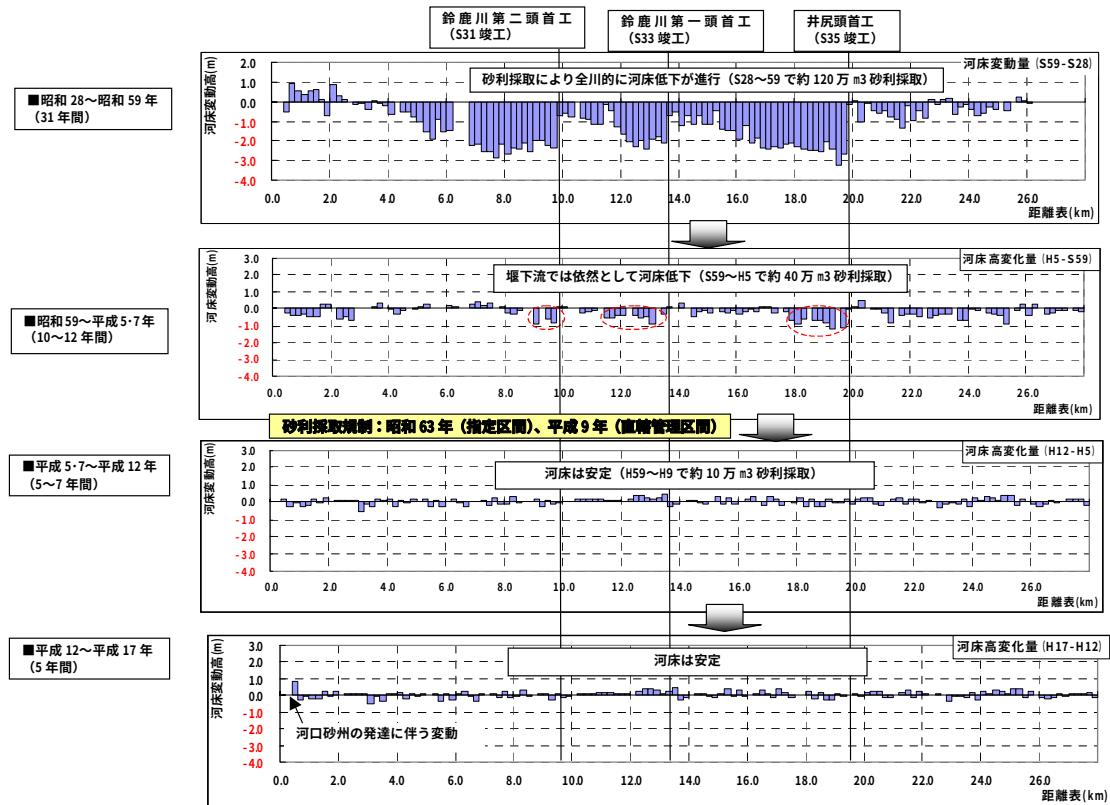


図8－5 鈴鹿川平均河床高変動の経年変化図

第9章 河川管理の現状

9-1 河川管理区間

1) 管理区間

鈴鹿川流域においては、洪水や高潮等による災害の発生を防止し、河川の適性な利用、流水の正常な機能の維持、河川環境の整備と保全の観点から日々の河川管理を行っている。

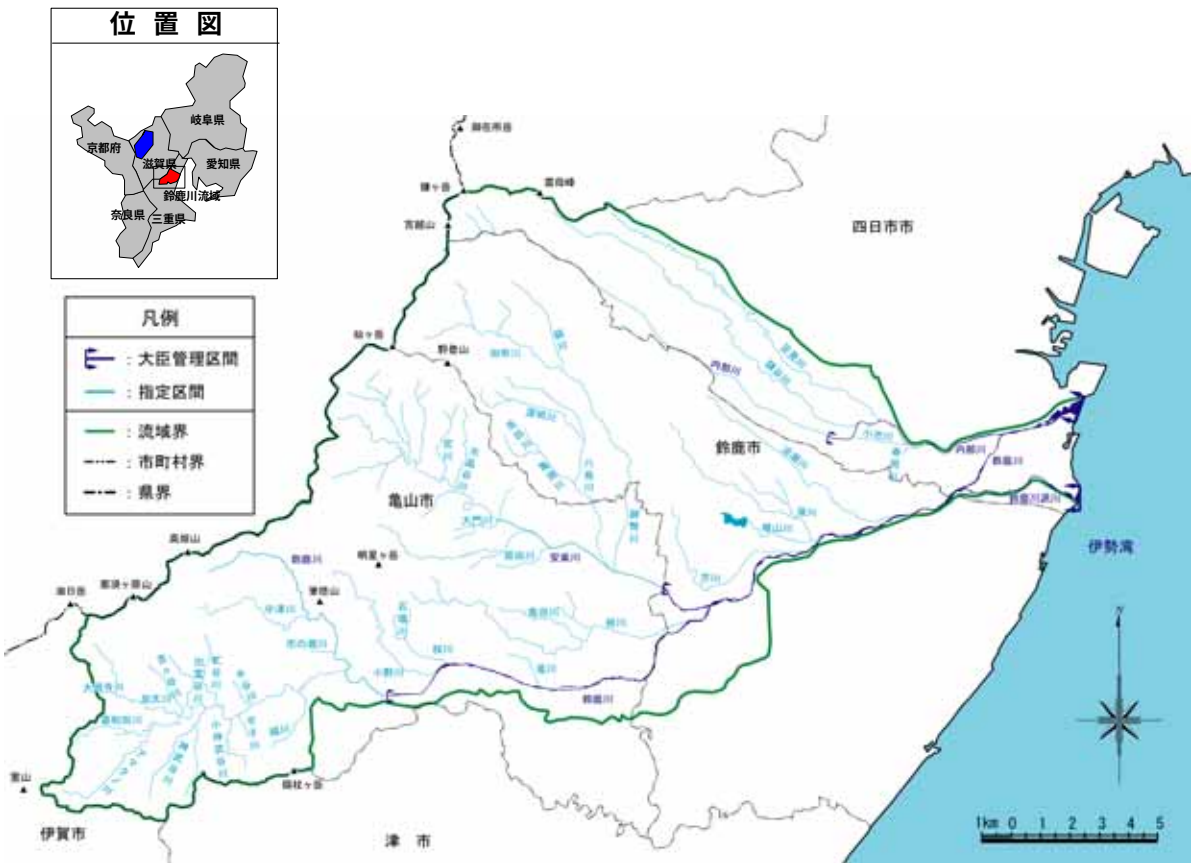


図9-1 鈴鹿川管理区間概要図

表9-1 管理区間延長

河川管理者	河川名と区間	管理区間延長 (km)
国土交通省	鈴鹿川 河口～亀山市まで	28.5
	内部川 四日市市北小松町～鈴鹿川合流点	6.8
	安楽川 亀山市田村町～鈴鹿川合流点	1.9
	鈴鹿川派川 鈴鹿川からの分派点～河口	4.0
	直轄管理区間合計	41.2
三重県	指定区間合計	205.3
合計		246.5

2) 河川区域の現状

直轄管理区間の河川区域面積は以下のとおりであり、高水敷は概ね荒れ地が多い。高水敷のうち約 86.7% (740 千㎡) が官有地となっており、広い面積を有する場合にはグラウンドの整備が成され、沿川住民のレクリエーションの場として利用されている。

また、14～15km 付近及び km 付近及び 26～27km 付近は牧草地として利用されている。

表 9－2 直轄管理区間の管理区域面積 (単位：千㎡)

	低水路 (1 号地)		堤防敷 (2 号地)		高水敷 (3 号地)		計	
	官有地	民有地	官有地	民有地	官有地	民有地	官有地	民有地
管理区域面積	6,398.8	50.0	1,652.0	0.0	740.0	114.0	8790.8	164.0
計	6,448.8		1,652.0		854.0		8,954.8	

【平成 18 年 4 月現在】



高水敷の利用状況 (鈴鹿川河川緑地)

9-2 河川管理施設等

鈴鹿川の直轄管理区間における河川管理施設は、堤防・護岸等のほか、水門 1 箇所、堰・頭首工 12 箇所、樋門・樋管が 66 箇所、揚排水機場が 12 箇所などがあり、これらの河川管理施設の状況を把握し、適正な処置を講じるため、河川の巡視、点検を行っている。

表 9-3 直轄管理区間堤防整備状況

直轄管理 区間延長	施行令 2条7号 区間延長	堤防延長(km)					
		完成 堤防	暫定 堤防	未施工 区間	小計	不必要 区間	合計
41.2	0.0	43.6	24.0	10.5	78.1	3.4	81.5
比率(%)		56	31	13	100	—	—

【平成 19 年 3 月末現在】

表 9-4 河川管理施設一覧表（直轄管理区間）

種別	施設別	河川名	箇所数	計
水門	直轄	内部川	1	1
	許可	-	-	-
樋門樋管	直轄	鈴鹿川	8	9
		内部川	1	
	許可	鈴鹿川	36	57
		安楽川	2	
		鈴鹿派川	2	
		内部川	17	
揚排水機場	直轄	鈴鹿川	1	1
	許可	鈴鹿川	7	11
		鈴鹿派川	4	
堰	直轄	-	-	-
	許可	鈴鹿川	7	12
		内部川	5	
床止め	直轄	鈴鹿川	3	3
	許可	-	-	-
河底横過トンネル	直轄	-	-	-
	許可	鈴鹿川	3	5
		鈴鹿派川	2	
伏せ越し	直轄	-	-	-
	許可	鈴鹿川	1	4
		内部川	3	
橋梁	直轄	-	-	-
	許可	鈴鹿川	32	58
		安楽川	3	
		鈴鹿派川	6	
		内部川	17	
鉄塔	直轄	-	-	-
	許可	鈴鹿川	2	2

【平成 18 年 3 月現在】



図 9 - 2 堤防整備状況



谷川水門

河川名：内部川
位 置：9.6k+175.0m
完成年：昭和 31 年



管内排水樋門

河川名：鈴鹿川
位 置：18.4k+75.0m
完成年：平成 2 年



砂防堰 1 号

河川名：鈴鹿川
位 置：23.8k+42.0m
完成年：不明

鈴鹿川の直轄管理区間における許可工作物は、樋門樋管 57 ヶ所、揚排水機場 11 ヶ所、堰 12 ヶ所、河底横過トンネル 5 ヶ所、伏せ越し 4 ヶ所、橋梁 58 ヶ所、鉄塔 2 ヶ所、計 149 ヶ所にのぼる（平成 18 年 3 月現在）。

各構造物については、河川管理施設同様の維持管理水準を確保するよう、各施設管理者と協議し、適正な維持管理を行うよう指導している。

表 9-5 許可工作物一覧表（直轄管理区間）

施設名	数量	備考
樋 門 樋 管	57	鈴鹿川36、安楽川2、鈴鹿川派川2、内部川17
揚 排 水 機 場	11	鈴鹿川7、鈴鹿川派川4
堰	12	鈴鹿川7、内部川5
河底横過トンネル	5	鈴鹿川3、鈴鹿川派川2
伏 せ 越 し	4	鈴鹿川1、内部川3
橋 梁	58	鈴鹿川32、安楽川3、鈴鹿川派川6、内部川17
鉄 塔	2	鈴鹿川2



鈴鹿川第二頭首工
河川名：鈴鹿川
位 置：9.6k+175.0m
完成年：昭和 31 年



鍋田揚水機
河川名：鈴鹿川
位 置：26.2k+120.0m
完成年：不明



北一色用水樋管
河川名：鈴鹿川
位 置：4.0k+4.0m
完成年：不明



近鉄名古屋線派川橋梁
河川名：鈴鹿川派川
位 置：1.8k+77.0m
完成年：昭和 6 年

9-3 水防体制

1) 河川情報の概要

鈴鹿川では、流域に雨量観測所6箇所（すべてテレメータ）、水位・流量観測所6箇所（すべてテレメータ）を設置し、河川管理の重要な情報源となる雨量、流量等の観測を行っている。

これらから得られる情報は、河川管理施設の操作、洪水時の水位予測等河川管理上また水防重要なものであるため、常に最適の状態での観測を行えるよう保守点検・整備を実施している。また、必要なデータが迅速かつ正確に得られるよう、光ケーブル等の情報基盤を整備中である。



図9-3 鈴鹿川水系雨量水位観測所設置位置図

2)水防警報の概要

鈴鹿川、鈴鹿川派川、内部川、安楽川では、洪水による災害が起こりうる可能性がある
と認められたときには、水防警報を発令し、水防団や近隣町村の関係機関と協力して
洪水被害の軽減に努めるよう態勢を組んでいる。

3)洪水予報河川の指定

鈴鹿川では、水防法第 10 条および気象業務法第 14 条に基づき、平成 7 年度に洪水予
報指定河川に指定され、津地方気象台と共同で洪水予報・警報の発表を行い、周辺住民
への適切な情報提供を実施するようになった。

表 9－6 鈴鹿川水防対象観測所、指定水位

河川名		鈴鹿川 鈴鹿川派川		内部川	安楽川
観測所名		亀山	高岡	河原田	川崎
基準水位 観測所	洪水予報	○	○		
	水防警報	○	○	○	●
	情報周知			○	
基準水位 (m)	指定	2.70	2.50	1.10	2.50
	警戒	3.40	3.60	1.90	2.80
	出動	3.80	4.00	2.30	3.00
	特別警戒	—	—	2.50	—
	危険	4.80	4.80	2.80	—

*○：指定、●：暫定

9-4 危機管理への取組み

1) 水防連絡会との連携

鈴鹿川では、洪水・高潮等による被害の発生を防止または軽減するため国及び地方自治体の関係機関が連携し、水防活動を迅速かつ円滑に行うための「三重四川災害対応連絡会」が結成されている。連絡会では、災害関連情報の共有化、水防関連情報の伝達、水防活動の円滑化、合同河川巡視、情報伝達演習、ロールプレイング演習等の実施、ハザードマップ整備における支援及び情報交換、水防・防災に関する啓発活動等を行っている。

表9-7 三重四川災害対応連絡会の構成機関（鈴鹿川関係分）

機 関 名	
国土交通省	三重河川国道事務所
三重県	県土整備部 四日市建設事務所 鈴鹿建設事務所
四日市市、鈴鹿市、亀山市	

2) 水質事故対策の実施

① 水質事故の実態

鈴鹿川水系の近年10ヶ年における水質事故の発生状況は表9-8のとおりである。

鈴鹿川では、事故による油流出が最も多く発生しており32件となっている。これ以外には、その他が3件、魚類のへい死が2件である。

表9-8 鈴鹿川における水質事故発生状況

年度	水質事故の種類					計
	事故による油流出	粘土	化学物質	魚類のへい死	その他	
8	0	0	0	0	0	0
9	1	0	0	0	0	1
10	5	0	0	0	1	6
11	7	0	0	0	0	7
12	3	0	0	0	2	5
13	5	0	0	0	0	5
14	7	0	0	0	0	7
15	1	0	0	0	0	1
16	1	0	0	1	0	2
17	2	0	0	1	0	3
合計	32	0	0	2	3	37

②水質汚濁対策連絡協議会との連携

鈴鹿川では、三重四水共通で河川及び水路に関わる水質汚濁対策に関する各関係機関相互の連絡調整を図ることを目的に、「三重四水系水質汚濁対策連絡協議会」を設置し、水質の監視や水質事故発生防止に努めている。協議会では、水質の常時観測や資料収集、緊急時の連絡調整、水質汚濁対策の推進、水質に関する知識の普及・広報活動等を行っている。

表 9－9 三重四水系水質汚濁対策協議会の構成機関（鈴鹿川関係分）

機 関 名
国土交通省中部地方整備局
中部経済産業局
三重県
鈴鹿市
亀山市
四日市市

3)洪水危機管理への取り組み

地域住民へ、洪水に対する知識・意識を高めること、また広域的に浸水想定区域を把握してもらうことを目的に、浸水想定区域の指定・公表や洪水予報河川でない鈴鹿川水系の支川(安楽川、内部川の大正管理区間)も合わせた浸水想定区域、及び当該地区が浸水した場合に想定される水深その他を示した浸水想定区域図を作成し、情報提供を行っている。

鈴鹿市では、平成 15 年 3 月に洪水ハザードマップを作成・公表するとともに、鈴鹿川沿川で大規模な洪水や地震などが発生した場合に総合的な防災態勢を迅速に対応するため、河川防災ステーション「鈴鹿川防災ステーション」を整備し、鈴鹿川全域での防災活動の拠点づくりに取り組んでいる。四日市市においても平成 17 年 3 月に洪水ハザードマップを作成・公表している。

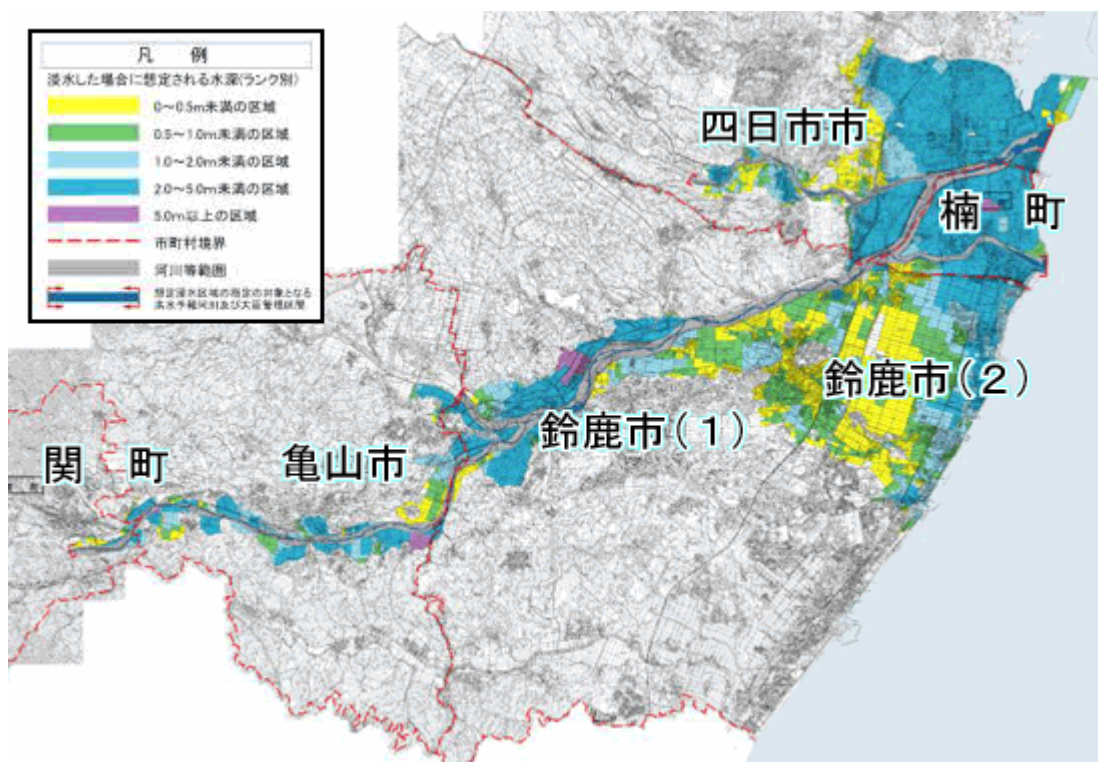


図 9 - 4 浸水想定区域図

【出典：三重河川国道事務所 HP】

想定氾濫区域における面積、人口等は次の通りである。

表 9 - 10 想定氾濫区域緒元表（面積、人口、資産）

想定氾濫区域面積	氾濫区域内人口	氾濫区域内資産額
69km ²	約 80,000 人	約 1 兆 3000 億円

第10章 地域との連携

鈴鹿川では、「川と海のクリーン大作戦」として、住民や各種団体、企業、自治体、河川管理者・海岸管理者が協力し、ゴミ清掃だけでなく、川や海をふれあいの場とする活動が実施されている。

また、三重県では、住民と行政との協働による個性と魅力ある地域づくりを進める「生活創造圏づくり」を具体的な取組につなげるための先導的な事業として、県内の各生活創造圏ごとに「生活創造圏ビジョン」を策定した。鈴鹿川は鈴鹿・亀山生活創造圏と四日市生活創造圏に属し、前者では鈴鹿川を通じてのやすらぎ（水を大切にする流域づくり、魅力ある歴史、文化の流域づくり、人が集う流域づくり）、後者ではごみ問題解決に向けた行動の輪づくりをテーマとして取組んでいる。



（鈴鹿市高岡橋）



（亀山市鹿島橋）

川と海のクリーン大作戦の実施状況（平成19年）